

高等学校で必要な早期支援

—支援のニーズを引き出すために—
Support for High School Students
— The Needs of Special Support —

宮城政昭, 川角 博, 坂井英夫, 籠谷 恵¹, 五十嵐由美¹, 喜納祐子²
新田英雄³, 松尾直博⁴, 塚越 潤⁵, 鈴木崇子⁶

<要旨>

本校では平成19年度・平成20年度の文部科学省「高等学校における発達障害支援モデル授業」に続き、東京学芸大学特別開発研究プロジェクトに応募し、「高等学校における『発達障害支援』の具体的な取り組み」の研究を2年間組織的に行った。今年度は、有志により「高等学校で必要な早期支援」の研究および実践を行ったので報告する。本校の場合、過度の期待や進路に対するプレッシャーから学校生活に対応できなくなり、本人の意思とは裏腹に不規則な登校状態になる生徒が目につく。また、友達を作るのが苦手で、どこにも訴える先を持たない、生き辛さを抱えた生徒の早期の把握は、早期支援に欠かせないことである。

<キーワード> 早期支援 早期把握 啓発活動 支援チーム 連携 学習支援 評価の工夫

1 はじめに

本校では、平成19年度・平成20年度の2年間、文部科学省の「高等学校における発達障害支援モデル事業」の指定を受け、校内に支援委員会の設置やコーディネーターの配置などといった支援体制が整備され始めた。それまで校内には、生徒の相談を行う分掌はなく、担任や養護教諭などが個別に生徒に関わる状態であった。また、「発達障害」に関しても教員間の認識が乏しく、まずは啓発活動からのスタートとなった。その後、4年間の研究体制の維持により、12回の教員の研修会と8回の保護者向け講演会、2回の生徒向けの講演会を実施してきた。研究体制が維持できなくなった今年度も、啓発活動として保護者向けの講演会、新入学の生徒向けの講演会と年2回の教員研修会を維持することができた。組織的な支援体制を作るだけでなく、生徒や保護者に情報を提供し、有機的に運用して行くには、教員の研修会だけでなく、生徒や保護者に向けての発信は不可欠のものとする。

さて、これらの啓発活動により、少しずつ早期支援の大切さに関する理解が深まって来ている。また、校内の組織的には、毎週支援委員会と相談室連絡会が行われ、個々の生徒に関する把握が進んで来ている。しかし、個別支援に取り組んだ事例でも、期待した成果が上がらない

ケースもあり、対応の難しさを痛感する。そこで、事態が動かなくなる前に早期に対応できるよう、早期把握や早期支援の具体的な取り組みの検討、さらには、困り感を感じていない生徒にも役立つような教科指導法の工夫など「高等学校で必要な早期支援」について、さらに考えてみることにした。(文責：宮城政昭)

2 高等学校で必要な早期支援

2-1 欠席調査

生徒の異変に注目する方法として、5年前から本校では欠席調査を取り入れてきた。高等学校では基準はそれぞれ異なるが、授業に出席できなければ単位修得ができなくなる規定が設けられている。「発達障害」と認定されてから、その対応を行うのではなく、「普通に登校し、普通に授業に出るということが困難になる生徒」に、まず目を向ける必要がある。その中には発達障害などに見られる対人関係やグループワークの苦手な傾向や、完全にやりきれないと次へ進めないケース、関心のうすいことにはうまく取り組めないケース、そして、「うつ」などの精神的な変動の大きいケースなど様々な要素を持つ生徒がいる。もちろん学校の対応だけではどうにもならないこともあるが、早期に気づき話し合いを持つ中で、少しずつ学校生活が安定していったケースもある。

欠席調査は、月3日以上欠席した生徒をリストにあげ、2ヶ月以上リストに登った生徒を検討し、支援の必要が

¹養護教諭 ²スクールカウンセラー ³校長

⁴教育心理学講座准教授 ⁵東京学芸大学附属竹早中学校養護教諭

⁶東京学芸大学大学院教育学研究科

ある場合は、支援の対象として支援チームを作って行くという単純なものであったが、研究の初年度で支援をした生徒のすべてが、この条件で見出された生徒であった。その後、登校して保健室にいるため欠席にはならないが、授業に出られない生徒や特定の科目だけ欠課がかさむ生徒への対応のため、欠課時数調査も行ったが、調査が煩雑な割には、新たな対象者を見出すケースは少なかった。現在、科目での欠席の集計は、考査時の集計に委ねている。また、コンピューター上での出欠席の管理も充実してきたので、日々の状況を素早く確認できる体制へと進化している。かつては1ヶ月の欠席調査の合間に欠席が増えていたようなことがあったが、現在では毎週欠席の確認シートが担任の手元に届いている。

2-2 生徒の把握

高等学校の場合、ホームルームの担任がそのクラスの生徒と接する時間が長いとは限らない。教科指導で担当していない場合でも、担任を持つことは多い。生徒の情報は、授業担当者、クラブ活動や委員会活動の担当者などからもたらされることもあるが、通常は何かトラブルが起きてからでないとなかなか伝わって来ない。「ちょっと気になること」などは、教員同士が互いに意識していないと伝わりにくいし、教員集団全体で共有することは難しい。また、情報は発信者と受け取る側が必ずしも同じに解釈するとは限らないので、その共有には繰り返しの伝達が必要である。

保健室に頻繁に顔を出す生徒は、何らかの伝えたいことを持っていることが多いので、来室状況を伝えてもらうことは有り難いことである。ケガの治療の合間に体調や不安な気持ちなどをそっと相談して行くこともあり、早期支援には欠かせない場所でもある。本校の場合、相談室の予約なども保健室を通して行われている。また、保健室に頻繁に顔を出す生徒中には、お気に入りの場所があり、そこで暫く休んでまた教室に行く生徒もいて、ちょっとした会話の中で、生徒同士で不安な気持ちを話し合っている光景を見ることがある。担任も時々保健室をのぞいてみると良いだろう。

教科指導中で見られる困難も様々である。あまりにも完璧を期すため、納得するまでレポートなどの提出物が提出できないようなケースでは、どんどん処理のできない課題が増えて行き、やがて身動きできなくなってしまうことがある。また、グループでの課題がうまくこなせないケースでは、そもそも対人関係が苦手で、一緒に活動すること自体が大きなストレスとなっていたり、何で

もかんでも押し付けられたり、一人が上手く行かないことで全体の評価が下がることへのストレスを感じて、発表の当日欠席をしてしまうようなことがある。ややもすると、「努力が足りない」とか、「やる気がない」というように、判断されがちなことかもしれないが、このような不安を抱えた生徒がいることを教科指導者は知っておくべきである。そして、はじめは些細なことかもしれないが、同じような経験を積み重ねることによって、自己肯定感は下がり、まわりからの低い評価が固定化してしまうことにより、集団の中に居場所を失い、その違和感から教室に出られなくなったり、あるいは誰にも気付かれないようにじっと耐え忍んでいたりということがある。特に「うつ」状態まで進行してしまうと、本人は頑張ろうと思っても無理な場合が多く、気持ちと行動が一致しなくなる。「計画的に休んでいるのではなか？」というような心ない言葉にさらされると、生徒は深く傷ついてしまう。教員は誰にでもわかりやすい手法を用いた授業のあり方を考えるのはもちろんであるが、訴えはなくても傷ついた気持ちをしまいこんでいる生徒がいることを理解しておきたい。

2-3 生徒の居場所

放課後、教室を回ってみると広い教室で一人で勉強をしている生徒を見かけることがある。今年3.11の震災以後、節電が浸透しているため、電気も消したまま黙々と勉強している。時々声をかけてみると、大半が明るい声が返ってくるので安心するが、放課後の教室は、クラブ活動に参加する生徒が多いため、人影は疎らである。比較的たくさんの生徒が残っている時は、どこかの教科の課題の締め切り間際ぐらいのようだ。逆にいうと、クラブ活動に入っていない生徒は、みんなで語らう場所がないのかもしれない。

放課後の保健室は、部活に入っていないけど人恋しい生徒で賑わっていることが多い。何となく定位置があり、あまり干渉はしないが、ちょっとした相談ごとが会話の中に混じる。互いを支え合うピアサポートの要素がそこにある。下校時刻になると養護教諭に促され家路につく。中には、朝から少し休んで行ったり、休み時間ごとにやって来たり、昼休みにお弁当を持ってやって来る生徒もいる。保健室という空間が、安心できる居場所になっている常連さんもかなりいる。今の保健室は、けが人や病人の対応だけでなく、生徒のこころを癒す居場所の機能も持っている。

このような生徒の居場所を増やす試みとしてお茶会が

持たれている。担任との関わりだけでなく、担任以外の先生や大学生との、ソフトな関わりの方として、お茶会やお茶会ミニを始めたのは4年前になる。当初は、学年の全員の先生が一つの部屋に集まり、普段話したことのない先生とも気楽に相談できる場としてお茶会はスタートした。その後、生徒と年齢の近いお兄さんやお姉さんと話せる場として、東京学芸大学の教育心理学講座の大学生をお願いしてお茶会ミニに発展し、現在は、「誰でもようこそ」というキャッチフレーズで、お茶会ミニを継承したお茶会が続いている。今の3年生は入学当初から、下宿生の集い（2年生の下宿生に頼んで生活面の苦労や学校生活のアドバイス）、タイ国生との集い（タイ国生と話そう）、海外の留学生との集い（短期留学でやって来た留学生と話そう）などの企画を交えながら、進んで来たので、関心がある時や時間があるとき、「ちょっと寄ってみるか」という雰囲気が生徒の中に出来上がっている。

今年は、東京学芸大学の大学生をお願いしたお茶会を火曜と金曜の放課後に、交互に実施した。毎回、何名かの生徒がやってくるので、このような取り組みに対するニーズはある。また、震災後の春休みに、学校での生徒の活動が中止になるなど、様々な不安な状況を経験した今年、夏休み期間中に、3年の教室の近くでお昼を食べながら休める場としての昼のお茶会も行った。3年生は9月の辛夷祭（文化祭）に全クラスが演劇で参加するというので、部活動を引退した後も多くの生徒が登校している。夏休みはその疲れもピークに達するので、冷たい飲み物と場所を提供するだけで沢山の生徒が入れ替わりやって来た。そして、各クラスの準備の進行状況などの情報交換をする姿が見られた。

以下に、新しい居場所となったお茶会の参加人数の推移を示す。生徒の多忙なときは参加者が少ないようである。

表1 お茶会参加者の推移（平成23年）

4/15（金）	9名	9/2（金）	5名
4/22（金）	1名	9/6（火）	1名
5/13（金）	9名	9/14（水）	9名
5/27（金）	5名	9/30（金）	8名
6/3（金）	6名	10/4（火）	7名
6/7（火）	7名	10/14（金）	6名
6/17（金）	5名	10/18（火）	7名
6/21（火）	7名	10/28（金）	4名
6/26（金）	4名	11/8（火）	8名
7/1（金）	9名	11/18（金）	6名
		11/22（火）	9名
		12/2（金）	6名

表2 昼のお茶会の参加者（平成23年）

7/20（水）	14名		
7/21（木）	14名		
7/22（金）	13名		
7/25（月）	17名		
7/26（火）	5名		
7/27（水）	19名	8/29（月）	44名
7/28（木）	8名	8/30（火）	22名
7/29（金）	19名	8/31（水）	52名

なお、夏休みの昼のお茶会は、生徒の活動が休みになる昼休みを利用したため、大学生はきていないが、面談の合間に担任の先生もお弁当を持って顔を出してくれた。以下に7月27日から29日にかけて行った昼のお茶会の参加者に対するアンケート結果を紹介する。

昼のお茶会参加者アンケート結果（回収25）

1) 昼のお茶会はどうでしたか？

あって良かった	25	なくても良かった	0
---------	----	----------	---

(理由)・他のクラスの人と交流できた

- ・人がいっぱいいて楽しかった
- ・癒された
- ・みんながいるから
- ・おなががすいていたから（お菓子があった）
- ・先生方と話す機会ができて楽しかった

2) 参加した理由はなんですか？（複数回答可）

時間があった	13	通りかかった	12
友達付き合い	6	演劇の情報交換	2
和みの時間	12	先生とのほなし	2
その他	・お菓子やアイスがあった（笑）4 ・みんなと話せて息抜きになった1		

3) 最近気になることや心配なこと（複数回答可）

辛夷祭のこと	17	進路のこと	14
友達のこと	1	家族のこと	2
その他	・おなかのこと（役作りで） ・受験に向けてのこと		

4) 学校への要望

- ・夏休みも購買をやって欲しい
- ・レポートが多く辛かった
- ・8月もお茶会をやって欲しい
- ・環境整備を（蚊とか銀杏とか…）
- ・エアコンをすぐ消される
- ・昼にエアコンを切らないで下さい
- ・ゴキブリホイホイの設置

夏休みに入ってすぐ行った昼のお茶会は、このように好感を持って受け入れられたので、8月末にも同様に実施することにした。昼休みは、ちょうど午前の活動と午後の活動の合間で、時間にもゆとりがあったようだ。また、ここで寄せられた学校への要望の中に、昼休みのエアコンの使用に関する意見が複数あった。折しも、節電のため、全校を上げての対策を検討していたこともあり、活動時間外となる昼のエアコンを消すように指示があった。高校生にとってエアコンは贅沢なようにも思えるが、ここ数年の異常な暑さに、健康面でも必要な状態が続いている。夏の炎天下に屋外で演劇の練習をしなくてはならないキャストにとって、昼は唯一の体を休められる時間でもある。このアンケートを切掛けに、体調面の管理の心配もあり、節電には気を配りつつも、画一的に対応することがないように要請することができた。

さて、お茶会は生徒の居場所として機能しているのだろうか。以下に、今年のお茶会に参加して、実際に生徒に対応してくれた東京学芸大学大学院生の鈴木崇子さんが原稿を寄せてくれたので紹介する。

「お茶会を通して得たこと、感じたこと」

東京学芸大学大学院 教育学研究科
学校心理専攻 臨床心理コース
修士2年 鈴木崇子

1. 活動概要

活動日程：月3～4回、16時～17時

活動場所：小会議室（教育実習期間中は歴史教室）

学生スタッフ：3名（明本・遠藤・鈴木）

担当：隔週火曜・鈴木

隔週金曜・明本、遠藤

活動内容：生徒同士の雑談、生徒と学生スタッフ・先生方の雑談

2. 活動を振り返って

今年度の4月からお茶会に学生スタッフとして参加させて頂くことになった。これまで、小学生や中学生と接する機会は多かったが、実際に高校にお邪魔して高校生と関わることは、私にとっては東京学芸大学附属高等学校でのお茶会が初めてのことであった。そのため、参加し始めたばかりの頃は、参加することを楽しみに感じてはいたが、「どのように生徒とコミュニケーションを取っていけば良いのだろうか」、「共通の話題はあるのだろうか」、「自分は活動中、どのように振る舞えば良いのだろうか」といった不安も感じており、とても緊張していた

ように思う。そのように緊張した状態で参加していたが、お茶会に来てくれる生徒は温かく受け入れてくれ、私自身も徐々にお茶会の雰囲気慣れ、自分らしく生徒との会話を楽しむことができるようになっていった。

参加生徒は56期生（3年生）が多く、入学時からお茶会が実施されていたということで、お茶会には私よりもずっと親しみがあり、慣れている生徒が多いと思われる。参加生徒は個性豊かで、細やかな気配りのできる生徒や様々な話題を提供してくれる生徒、どの生徒にも明るく話しかけていく生徒、場の流れをうまく盛り上げてくれる生徒など、生徒それぞれの持っている能力や性格に支えられて、お茶会が成り立っているように感じている。そのため自分の意識が、参加開始時に抱いていた「自分がお茶会そのものを動かしていかなければ」というものから、「生徒たちがお茶会の雰囲気をつくっているのだから、それに寄り添うようにその場にしよう」という意識へと変化していった。

活動中は友人や先生方、学生スタッフとの会話を楽しむ生徒が多い。お菓子を目当てにやって来てすぐに帰宅する生徒もいるが、そのような生徒ともちょっとしたやり取りができることを嬉しく思っている。

また、参加生徒の中には「気になる」という印象を持つ生徒も存在し、金曜日に参加する学生スタッフと当該生徒について情報交換をすることもあった。この生徒は、自分から会話の輪に入ることは少ないが、こちらから話しかけると様々なことについて話をしてくれる。自分の好きなものや部活動について話しているときは、表情もいきいきとして楽しそうであった。そのため、他者と関わりたいという気持ちはあるものの、自分からコミュニケーションを取っていくことが苦手であると思われる。年度初めは継続した参加が見られたものの、夏休み前から参加が少なくなり、2学期中の参加は2、3回程度であった。しかし、そのような生徒が参加し、誰かとのコミュニケーションを楽しむ時間を提供できているのならば、お茶会は何らかの支援を必要とする生徒も対象とすることが可能な取り組みであると言え、実施する意義がある活動であると言える。

また、支援ニーズのある生徒でなくとも、友人とのコミュニケーションは楽しみや安心感を得られる機会であり、受験に対する不安や日々の疲れから一旦離れ、リフレッシュする方法としても有効に機能していると言えるだろう。

3. 今後に向けて

1) 学年の枠を緩やかにする

これまでのお茶会に参加した生徒は、ほとんどが56期生であった。時折57期生が数人参加することもあったが、部活動や行事の都合もあり、56期生以外の参加者は少ない。そこで、今後各学年で新たにお茶会を実施する際は、学年を限定せずに実施していくことができると良いのではないだろうか。

すぐに学年に関係なく様々なやりとりをすることは難しいと思われるが、他学年の生徒との会話から得られるものは多い。例えば、1, 2年生が上級生と会話をする中で、これまでの学校行事の様子や、定期考査の対策、受験に向けての考え方などを聞くことができれば、「どうすればいいのかよく分からない」といった不安の解消に繋がり、困難に出会った際も対処しやすくなるだろう。2, 3年生が下級生と会話をし、日々の生活の様子を聞いて、これまでの学校生活を振り返って懐かしんだり、辛いことを乗り越えたりしたことを思い出したりするといった経験は、学校や仲間への愛着が強まったり、自分の努力を再認識できたりする機会になると思われる。また行事や定期考査について「自分はこのようにやってきた」といったアドバイスは、下級生にとって有用な情報となるだけでなく、上級生が「自分の経験が誰かの役に立っている」という意識を持つことができるだろう。

学年の枠を緩やかにしたお茶会が実施できれば、学年に関係なく、生徒同士が相互に支え合うようなコミュニケーションが可能になると考える。

2) 記録について

活動の様子や生徒の様子で気になった事柄などを記録しておくことで、生徒の状態をより丁寧に把握できると思われる。記録として残されていれば、生徒の情報を学年全体でより共有しやすくなり、必要な支援について迅速に検討し、対応していくための情報源の一つとなる。

更に、現在は隔週火曜と隔週金曜にお茶会が実施されているため、記録を残しておくことによって、学生スタッフ同士の情報共有もよりスムーズに行うことができると思われる。スタッフ内でも生徒の情報を共有することができれば、生徒の変化をより細やかに捉えることができるだろう。

一方で、どのような形式であっても「記録を残す」ということは生徒の個人情報扱うこととなる。そのため、情報の保存方法（保存する媒体、保管場所など）については慎重に考慮すべきであるが、早期対応・早期支援へと繋げるための有効な方法の一つであると考えられる。

2-4 生きにくさと向き合う支援

本校の毎日は実に忙しい。学校説明会で「勉強も掃除も大切にします。」という言葉にひかれて、この学校を選んだという保護者の方から、「実際入学してみると、ゆっくり勉強する時間もなく、部屋の掃除の時間もなく、日々が過ぎて行く」ということを伺った。そう言えば、私自身も、しばらく、土日祭日もほとんど休みなく過ごしている。もちろん、部屋の掃除をする時間もゆっくり創作活動を楽しむ時間もない。いつからこんな事態になってしまったのだろう。どうも、土曜が休みになり、ゆとり教育が叫ばれるようになってからではないだろうか。

現在、本校のカリキュラムは、週2回、7時間の日がある。密度の濃い授業が7時間ある日は、我々も疲労するので、生徒も相当疲れていると予想できる。うまくリラックスできる時間を作れば良いのだが、昼休みは委員会やグラウンド整備で昼食すらゆっくりとれない。放課後の部活が終わると、夜10時過ぎまで塾に通う生徒もいる。家に帰っても「勉強しなさい」と言われては、どこにも居場所がなくなってしまう。

本校に入学して来る生徒は、皆、保護者の期待は大きく、その期待に答えるべく頑張っている。しかし、中には寿命を縮めるくらい頑張っても、まだ納得できない完璧主義の生徒もいる。いや多い。そんな生徒は、両親からの期待に答えようと、一生懸命頑張るが、ちょっとしたつまづきから、身動きできない状態になってしまうことがある。そんな変化に早く気づき、本来ある「楽しんで物事に打ち込める」ように環境を整えて行くことが必要だ。

また、高等学校では、うつや神経症と診断されるケースもかなりある。自我に芽生え、他者との違いに関心が高まることも、その背景にあるのかもしれないが、「こうでなければならぬ」というこだわりの強さや、コミュニケーションのずれ、認識のずれなどの、小さな違和感の積み重ねが、大きなストレスとなり、混乱を生じているケースもある。「一生懸命やればやる程、うまく行かないこと」でも、「あきらめかけて、肩の力が抜けた時、うまく行くこと」も意外と多い。

「生きにくさ」とは、いったい何だろうか。自分の思い通りに行かず、傷つき、挫折することだろうか。集団の中でみんなと同じことを強いられることだろうか。一人でひっそりする時間が取れないことだろうか。「自分はノートを取らない主義なので、ノート提出があると困るんです。」と聞いたことがある。生き方や感じ方にも

個性があるように、「生きにくさ」もそれぞれである。自己の特性を知り、それを受容することが、他者の理解につながる。自分とゆっくり向き合う時間は大切な時間でもある。

さて、我々ができることが、「自分と向き合う時間を確保できる環境づくり」だとすると、この忙しい環境は考えものである。「休み時間10分だと、ゆっくり質問できない。」と言った生徒がいた。「放課後、質問に行っても、先生はいつも会議でいない。」と言った生徒もいた。授業を45分にして休み時間を増やしたり、授業は6時間までにし、放課後の一時間は会議を入れなくて、生徒との対応の時間を作ったり、様々な工夫が必要だと思う。

2-5 物足りなさとの向き合う支援

ゆとりのある生徒にも支援は必要である。例えばスーパーサイエンスハイスクール (SSH) などの申請が通った場合 (最近2年間申請している)、放課後の様相が変化することが考えられる。東工大の先生をお招きしての『飛び出せ工学君』という、「数学の理論を工学というものの作りにどう生かすか」という体験型の授業には、1年生から3年生まで40名くらいの生徒が集まった。高校の枠の中の授業だけでは満足できないギフトを持っている生徒はかなり多いようだ。電子顕微鏡を使った研究に参加するプロジェクトや「科学の甲子園」というような突然やってくる企画にも抽選するほど希望者が集まる。以前行っていたサイエンスパートナーシッププログラム (SPP) では、土曜の午後の3時間くらいを使った連続の講義という企画にも関わらず、毎回沢山の生徒が集まっていた。このように高校の授業の枠を越えた内容に興味や関心を示す生徒は多いようだ。

今年は、総合講座の中で「宇宙人文学」という人工衛星の画像データを解析したり、加工したりしながら、現在の地形と昔の地形を比較し、歴史上の記録と現在の様子を重ね合わせ、歴史の事実を検証するという試みの講座に、多くの生徒が集まっている。この講座で扱っている内容は、宇宙科学という理系的要素と、歴史や文献の研究といった文系の要素が融合した内容である。高校生は大学生と違って、専門に細かく分かれていない点が、このような取り組みに有効である。どんなことにも興味や関心を示すような余力のある生徒には、高校という枠を越えた学習の場などの提供といった支援が必要と考える。また、今年度は定期的に質問コーナーを提供した教科もあったが、これらの試みが、さらに発展し、興味や関心のあることを自由に話せるような「サイエンスカ

フェ」などとして定着し、物足りなさとの向き合う支援というニーズを満たすことに繋がるのではないかと考えられる。「ギフト」という個性をもつ生徒は、「質問ばかりして面倒なやつ」というような評価を受けてきた経験をもつ場合もあるが、自由に、そして深く物事と関われる場を是非つくってあげたい。

2-6 研修会の必要性

教員の仕事は多忙である。「専門分野は…」などと言っていたら追いつかない。目の前の困難を抱えた生徒に、「何とか力になりたい」と誰もが思う。しかし、どうやって対応したら良いのかいつも悩んでしまう。決まった正解があるわけではなく、それぞれの場合によって、対応の仕方は異なるわけだが、ある程度の指針があると取り組み易いように思える。そのため、研修会を行い、様々な事例で、対応についてのあり方を体験しておくで参考になる。

今年も2回の研修を計画した。第1回は5月19日に、昨年まで東京学芸大学にいらした児童精神科医の田村毅先生に、「青年期の『うつ』とその対応」というテーマで講師をお願いした。このテーマで研修会を行うことにしたのは、最近「うつ」と診断され、授業に出られなくなってしまっているケースが増えているように感じることや、精神的に落ち込み学校にやってくるのも辛く、やって来たとしても保健室で過ごすのがやっとならぬ生徒に、どのような対応をしたら良いのか専門家のアドバイスをお聞きしたかったことに基づいている。

第2回は12月12日には、本校の卒業生を招いて、高校時代の苦労や感じたことと、また自己とどのように向き合ってきたかを話してもらった研修会を実施した。不登校、精神疾患という過去と現在を受け止め、10年以上にわたって苦しんできた本人の話をもとに、今我々の目の前にいる悩みを抱えている生徒にどう向き合うかを考えてみるという試みであった。

2-6-1 精神科医からの助言から

5月の研修会では、田村先生から「先生方が具体的にどんなことを聞きたいか、アンケートがあればそれに即したお話ができる」というありがたい申し出があったので、早速アンケートを実施し、「学校での対応と、医療での対応の結びつき」という視点も絡めてお話しただいた。以下は、事前のアンケートの集計結果である。

「うつ」についての研修会事前アンケート回答15

1) 普段どのような生徒のサインに気を配っていますか。

- 言動や態度に変化はないか。
- 提出物の記入にいつもと異なる状況がないか。
- 欠席や遅刻の多さや表情の変化。
- 生徒が疲れていないか気にかけている。
- 表情、顔色、身だしなみ。
- 声の張り具合、提出物の提出状況（頻度、内容、字など）、授業への取り組み（座る姿勢など含めて）。
- 表情がふさいでいないか。
- 人間関係がとれているかどうか。
- クラスの話し合いや授業で、他人が発言しているときに表情が険しくなることはないか。

2) 生徒の変化に気付いたとき、家庭とどのように連絡をとっていますか。

- 担任を通じて状況を伝え、情報交換する。
- 深刻と判断すれば電話し、面談する。
- 連絡した方がよいこと以外は特に連絡しない。
- なるべく早めに連絡を取り、家での様子を聞く。
- 担任の先生に報告している。
- 早めに連絡し、気軽に相談してもらえるような雰囲気等で電話等をする。
- 保護者会や面談の時は話すが、そのために電話をかけたことはない。

3) 「うつ」と診断された生徒を担当または担任されたことがありますか。

ある 8 ない 4

4) 「うつ」と診断された生徒への対応で困ったことはありますか。

- どう対応していいのかわからない(引っ張るべきか、休ませるべきかの方向性)。
- ある種の「特別扱い」のような対応が周りの生徒に影響しないのか心配。
- 学校は基本的に頑張らせるところだが、うつは頑張らせることができない。進級などがからんできた時に、どう指導すればよいのかジレンマに陥る。
- 声をかけた方がよいのか、そっとしておいた方がよいのか迷うことがある。
- この生徒が「うつ」または「うつ症状」であるという情報を先に知っていた場合、その生徒と接するときどうしても身構えてしまったり、言葉を選んでしまったりする。
- 張り切り過ぎと感じられる時の対応。
- 励ませないとしたらどうしたら良いか。

ゆっくり休ませたいが、欠席がかさむと進級できなくなる学校の体制と休んでいるときに学校として何もできない無力さ。

生徒の困難さの理解と、すぐに普通に登校させたがる親の心情を慮る難しさ。

保護者が理解できるようにもっていくのに時間がかかるが、急ぐと失敗するケースが多いので、焦らないように心がけている。

体調を聞くと、返答が本当に正確なものなのか。

頑張らせた方がよいのか、休ませた方がよいのか。

5) 「うつ」と診断された生徒への対応で、うまく行った事例がありましたら紹介して下さい。

すぐに休ませ、専門家（医師）にまかせたところ、ほぼ復活した。

再登校に際し、はじめから全部出席させないで、少しずつ出席させながら、体力と気力の回復を待った。

本人にも 家族にも満足してもらえたが、何をもちて「うまくいった」とするかはわからない。

6) 「うつ」について、何かご質問がありましたら、お気軽にお書き下さい。

青年期の鬱病（鬱症状）の快復にはどの程度の時間がかかるものと考えればよいのか？

鬱病の治療は休養が一番と聞いているが、学校の場合、登校させながらの治療をせざるを得ないのが実情である。実際問題として、登校しながらの治療が有効と考えられるのか？

登校しながらの治療を考えると、どのようなことを留意すればよいのかアドバイスをいただければありがたい。

大人の鬱病（鬱症状）と青年期の鬱病（鬱症状）の共通点と相違点は何か？

鬱症状を押さえる投薬治療の長所と短所

「頑張ろう」というような励ましの言葉はいけないと聞くことがあるが、実際に診断されている生徒に接した時の対応や声かけの仕方について

予防方法や重症化しないための対策はあるのか。

「うつ」と診断された生徒がいるクラスの周りの生徒への影響。

どういう方針で対応すればよいのかわからない。

完全に休養させるべきか、無理をさせても学校へ引っ張り続けるべきかの判断。

若年期のうつは、その後（成人後）どのような経過をたどるのか？

学校において「このような状態」が見られたら注意

して欲しいという目安があれば知りたい。

- 本人への対応はもちろん、周囲の生徒への対応をいかにすべきか。
 - 「うつ」と診断された生徒に学校では何ができるか？医療機関とはどのような連携をすれば良いのか？
 - 生徒や保護者に受診を勧めるべきか？また、統合失調症については学校でどのように対応したら良いか。
 - 基本図書を何冊か教えて下さい。まず、本から知識を得たい。(何もわかっていないので)
 - 「うつ病」と「うつ状態」の違い(ドクターからは「うつ状態」と言われることが多いようですが)
- 7) 震災後の(学校の対応や)生徒の様子で、気になったことがありましたらお書き下さい。
- 学校での活動が春休みまでなく、生徒が残念そうでした。新学期以降フォローしきれていない気がする。
 - 揺れが収まらないことが、自覚のあるなしに関わらず、ストレスになっていないか心配。
 - 登校禁止にただけで被害にあったであろう生徒に対して何の配慮もしていませんね。
 - 生徒の心のケアなどに関して、学校としての対応が組織的になされていない。
 - 地震に関するアンケートが、生徒の精神的な不調を誘発した例がある。
 - 節電に関する取り組み(エアコンを控えるための制服規制の緩和も考えられる)について、学校の方針が考えられていない。
 - 政府や東京電力の対応に立腹、興奮、非難する声を聞くこと。(関心が高い現れだと思うが)

このように「うつ」と診断された生徒に、どのように対応するかについて、色々なことに頭を悩ませている教員像が浮かび上がってくる。もちろん、一人ひとりの生徒によって対応のしかたは違ってくるが、悩みの中心は、「学校ではどこまでできるか」という医療機関との役割分担の目安であろう。なお、今回、田村先生には、①「うつ」の理解、②学校でできること、③医療との連携、④質問・意見交換という流れで、研修会をやっていた。研修会後のアンケートも次に示しておく。

「うつ」についての研修会アンケート参加43(回収9名)

1) 今回の研修会についてどのように感じましたか。

大変良かった4

(理由)

- ・うつについての基本的な理解が得られた。
- ・うつについてもっと勉強しようという動機と方向性をいただいた。
- ・事前に先生方のアンケートがあったので、現実に対応した内容の研修会であったと思う。

良かった3

(理由) 細かな症例について知ることができたので。

ふつう2

(理由) 少し話が長かったかもしれません。

あまり良くなかった0

2) 「うつ」についての疑問点は解消されましたか。

はい3

(理由)

- ・一部の疑問点が解消されたという意味ですが、研修に出なかったら何もわからないままで、ぼんやりしていたことが少し明確になった感じがします。
- ・思春期うつに投薬があまり効かない、進級にこだわる必要は特になど、日頃疑問に感じていた事項について先生のご意見を聞くことができ、良かったと思います。

いいえ1

- ・「うつ」は治るというより、周囲が考えを変えることで受け入れられて行くだけなのではないかという疑問が残りました。「他人」の考えを変えさせるとするのは困難なわけで…

どちらとも言えない5

(理由)

- ・生徒をどこまで引っ張ったらいのかという疑問についてももう少し自分で考えたいと思います。
- ・難しいものだとはわかります。
- ・状況、ケースによって対応は異なると思った。
- ・まだまだわからない部分があるように思う。

3) 対応について「新たに発見した視点」はありましたか。

はい7

(理由)

- ・うつに対する薬が実はあまり効かないという立場を取られる専門医も存在することがわかった点。
- ・友人との仲間関係が諸刃の刃になる可能性があることは心しなければなりません。
- ・複合的な視点です。陰の力を認めつつ、陽の力を

育成する。すなわち、負の存在を認めつつ、安心感を与えながら親近感で引っ張って行く。

- ・生徒への対応はいい意味での諦めが必要ということから。
- ・症状の段階に応じて、目標を設定して「引っ張っていく」ことの意義を改めて知ることができました。
- ・基準を下げるだけでは進歩しないこと。

いいえ1

どちらとも言えない1

4) 田村先生にさらに質問したいことがありましたらお書き下さい。

- ・クラスにうつの子がいると、クラスで全体に行う指導も、「無理するな」的になりがちです。クラス全体に常に「無理しても全力を尽くせ」のような指導をしても大丈夫でしょうか。うつの子がそれを負担に思っ学校に来なくなるのでは、と心配になり、ついつい思い切った指導を回避している自分に気がきます。
- ・危険なサインというのがありましたが、お話になった以外に、教師から見て赤信号というサインがありましたら教えて頂きたい。

5) その他(自由記述)

- ・レジュメもわかりやすく、本を読むよりも、直接、ポイントが明確にわかって有意義な研修でした。今後もこのような研修があると、担任としてはとても助かります。
- ・さまざまな生徒の問題を学問的に解明する、こうした理論と実践を結ぶ研修をお願いします。
- ・うつについてももっと目を向け勉強するぞという気持ちになることができました。
- ・中学校ではほとんど(全くといっていいほど)見られなかった「うつ」といわれる生徒が高校生になると出現?していたのが不思議でした。田村先生に伺うと、附属特有というようにおっしゃられていたと思います。親の期待、本人の理想と現実の狭間で体が悲鳴を上げているのかもしれませんが。優秀な子供たちだからこその状況を見たようにも思います。症状が出ている生徒は一部とはいえ、これからの人生で生徒がどこかで悩むかの知れない障壁にいち早く直面している生徒たちがここにいると考え真摯に向き合いたいと思いました。
- ・内容的には、とても有意義だったと思います。しかし、試験期間中は、できればやめて頂けないものでしょうか。職員会議のない木曜日の放課後などで

実施して頂くように、お願いできないでしょうか。

- ・医師によって「学校と連携する人」と「そうでない人」がいると聞いた。どうしても学校と仲良くする側の人の話ばかり聞いてしまいがちだが、学校とは仲良くしない立場の人の話などを聞いてみたい。

2-6-2 卒業生との対談から

12月の研修会は、卒業生とパートナーとなった教員との対談から始まった。約1時間にわたって、高校時代から現在までの経過やその時の気持ちの変化などを、パートナーとの対談を通して聞いた。そして若干のグループでのディスカッションを交えた後、質疑へと移った。質疑の時間が予定の時間を越えたため、グループでの意見交換の時間は持たず終了した。また、この研修会についての意見をアンケートで集約した。

今回招いた卒業生は、現在早稲田大学人間科学部に在学している。本人曰く、小学校の前半は天真爛漫だったそうだ。4年生くらいから、まわりと比較され、本校に受かりたいという一心な気持ちで、中学時代は平均睡眠3時間で過ごした。また、内申確保のため、仮面を付けて点数が取れるように振る舞っていたという。そして希望の高校に入学したものの、受験で疲れていて精神的に息切れした状態になっていたという。高校1年の頃、保護者の間では、「みんな良く寝ている」ということが話題になっていたということなので、疲れきって入学してきた生徒はたくさんいたようだ。

さて、高校に入って初めての試験(中間考査)の偏差値が50だったとき、母親から「あと10高ければ東大を目指せるのに…」といわれたことを切っ掛けに、「まわりの景色が歪みはじめ、幻聴が始まり、やがて登校ができなくなって行った」と生々しい話が續いた。電車のドアにカーテンのようなものができ、電車に乗れなくなったり、人混みを前に引き返したりする日々が始まることになった。教員は、なかなかその情景までは思い浮かばない。本人の苦しさを理解するのは大変難しいことである。当時担任をしていた私は、何をしたら良いのか分からず、とにかく家庭訪問をしたことを覚えている。ただ学校に行くことがこんなにもハードルが高いことであるとは思ってもよらなかった。そして、まわりはものすごく勉強ができる中、プレッシャーで疲れていた。母親はいつも「もっと勉強しろ」と言っている。そのしんどい気持ちはいつも自分に向けられ、自分にウソをついていたと言う。それを「呪いをかけていた」と表現した。高校を出た時はエネルギーがゼロだったという言葉が印象深

い。その状態から大学に進学するまでには数年を要している。現在は、「自分は9時間寝ないと調子が悪くなる体質なのは仕方ない」と、体調に合わせてできる仕事を考えるというように、「病気とセット」を受け入れるに至っている。

そんな訳で遅刻の常習犯として過ごさざるを得なかった高校時代であるが、彼に対して教員は厳しく注意をしたり、「重役出勤か」と皮肉を言ったりすることがあったようだ。そこで遅れて授業に入るのを止めて、校内をぶらぶらしようと思っても、なかなか難しい現実があったようだ。

そんな中、彼を見つけて話をし、「困った時はいつでもここを使って良い」と居場所を提供してくれた先生がいた。そんな支えが、卒業を支えたことになる。3年になると、まわりは進学にシフトする。昼も勉強のことが話題になる。「昼は一人で弁当を食べた。」「しかし、その頃のことは、今までほやけていた。」というように厳しい日々だった訳だ。同じような悩みを抱えている生徒には、「ゆっくりで良い、状況がゆるすなら」とアドバイスしたいそうだ。また、その両親には「病気は気から…」と考え、「頑張りが足りないと思わないで欲しい。」「病気をしたら休養が必要なように、脳が疲れたら休むことが必要だと分かって欲しい」とアドバイスをしてくれた。あつという間の1時間であった。

<教員からの質問>

Q：未来が開けたのはいつ頃か。

A：はじめ東大文Ⅲを目指し、その後、理転、病気を治せるようにと医学部を目指した。ところが、「脳の働きを抑える薬をこれだけ飲んでいては無理」とドクターに言われさっぱりし、理系で英語の教職がとれる今の大学に志望が変わっていった。

Q：大学に向けてどんな努力をしたか。

A：真面目な子は、万遍なく上げようとするが、まず1個得意な科目をつくると良い。僕の場合は、英語から始めた。そして音読100回を続けた。

Q：病気を抱えながら卒業することに無理はなかったのか。

A：卒業をして良かった。特に友人関係が続いていることは有り難い。

Q：勉強はどういうプレッシャーだったのか。

A：「何か・・しなければならぬ」という附高生ならではの空気がある。健常ならOKでも、病気があると埋められない。

Q：「カーテンがかかったような」についてもう少し話して欲しい。

A：見えない時には学校に通った。でも高田馬場まで行くと人が多すぎた。そこから引き返したこともあった。人ごみも怖く「みんなで渋谷へ行こう」と言っても行けないこともあった。

Q：あざけているような声が聞こえた時のことは？

A：人の心の裏の裏まで探っていた気がする。猜疑心のかたまりだった。

Q：教科担当の先生に「あと3回来れば良い」と言われたのは、プレッシャーにはならなかったのか。

A：言われ方にもよるのかも知れないが、その時はうれしかった。

Q：休養が必要なとき、学校から「休め」と言われることはショックなのか。

A：休むことは罪悪感がある。自分がダメと思ったり、教師がダメと思ったりはあるが、「今は休養」と受け入れられれば良い。

Q：みんなが頑張っている列からはみ出してはいけないのか。

A：ダメと言っても、人間は失敗することもあるので、それをどうとらえるかだと思う。至先生から、「進歩することだけが人間ではない」と言われたことが印象に残っている。

Q：学校の先生にこうあって欲しいと思うこと。

A：できる子は、分からないことや困ったことがあればの対応でいい。遅れをとっている子、病んでいる子に時間をさくとその子たちは嬉しいと思う。

Q：伝えたいことは？

A：自分の意志でなく休まざるを得ない生徒には寛大であって欲しい。

<アンケート結果>

「卒業生の体験」についての研修会アンケート集計

(参加44名/回収26名)

1 今回の研修会についてどのように感じたか。

大変良かった12名

(理由)

- ・非常にクレバーだった(質問者の意図を汲み取る能力に感嘆した)。
- ・卒業生かつ経験者の声を直接聞けるというのは貴重な体験だった。
- ・苦しかった当時の内面の心情が良く理解できた。
- ・時代の価値判断そのものがマトリックスであるこ

- と。
- ・ありのままの受容が大切であることに改めて気づかせてもらえた。
 - ・困難に直面している生徒に聞きたいけど聞けないことが聞けた。貴重でした。
 - ・本人であるため非常に具体的だった。(努力が報われていた生徒が多い)
 - ・対談形式を取ることで、関わりが良かった。
 - ・卒業したとはいえ困難をもつ生徒に実際にふれることができたので。
 - ・わかっているつもりになっていた自分に気付かせてもらいました。
 - ・現在の附高生も抱えているのであろう悩みと共通と思える話をたくさん聞くことができた。
 - ・視野も広いし自分を客観的にとらえていて素晴らしいと思った。

良かった14名

(理由)

- ・こういう経験のある元生徒の声を聞けたのは有り難いが、こういう話をしに来られない元生徒のことを思うと複雑。
- ・あくまで一つのケース。すべての人の悩みを解消するものではありません。
- ・卒業生を呼んで、カミングアウトを通して、皆で考えて行くスタイルは斬新だった。
- ・乗り越えた話を聞くことができた反面、まだ進行形で適応して行かなければ行けないので、そんなに引き出して良かったのか心配。
- ・できれば黒板の前でお二人の顔が見える所で話を聞きたかった。声しか聞こえず残念。
- ・当時のことを振り返って、今の自分、今の高校生、教師に対してアドバイスをもらえた。
- ・様々なタイプの研修会を行うのが良いと思うから。

- ・もちろん全部ではないが、一部は解消されたように思う。
- ・もっと生徒を良く見なければならぬと思いました。
- ・やはり勉強のプレッシャーは想像以上に大きいのか…と再認識しました。

いいえ1

どちらとも言えない16

(理由)

- ・疑問はクリアーになったが解決されなかった。
- ・「あくまでS君のケース」という話が出ていましたが、その通りだと思うので。
- ・一般化しにくいように思える。「各生徒ごとにどこが根っこか違うかも」と思うので
- ・元附高の生徒の話を書く機会があって良かった。
- ・生徒は十人十色なので、s君と同じように対応すれば必ずしもうまく行くわけではない。
- ・人それぞれなので。
- ・はじめには中学校から高校へ上がる競争から、高校で初めての中間からの悩みと、当時と今とは違うかもしれませんが、生徒どうしが能力の高さを認めあっていられれば良いが、何故「うちの高校は特別」という自意識が高いのかわからない。
- ・ケーススタディとして参考になった。様々な例があるので一つをもってすべてを当然説明することではないので。
- ・ケースバイケースなので。
- ・生徒それぞれの課題、問題があるのだなということはある。困っている状況は少し理解された。
- ・事例として、かなり特殊性があった気がした。
- ・様々な生徒がいて、様々な悩みがあるので、一つの事例であるから。
- ・他の生徒の場合はまた違う点があると思うから。

2 「生徒の悩み」についての疑問点は解消されたか。

はい5

(理由)

- ・先行する人間の価値判断のモノサシは重い意味を持つことの自覚が必要。
- ・大人自身が激変する社会変動にどう対応するか。
- ・勉強のプレッシャー、理想とのズレ、埋められない、過活動
- ・一人の事例かもしれないが、生徒からのメッセージとして受け取ることができた。

3 対応について「新たに発見した視点」はあったか。

はい15

(理由)

- ・身体の一部としての「脳が疲れているので休ませる」という視点は特に印象に残った。
- ・家の中、自己の内側にこもらず、積極的な社会参加や自然とのふれあいが「セットで自分」だという自己受容を促したのだと思う。
- ・既に聞いたことであっても今回の話で腑に落ちた感触。

- ・セットで自分（外の経験、これくらい自分でできる。自分の理解）
 - ・心の病い＝ケガと一緒に
 - ・人は素敵だなーと感じた。
 - ・仮面の外し方のヒントをもらいました。
 - ・教師の一言を生徒（卒業生）はよく覚えていて、その一言を励みにしたり、その一言変わることがあったりすることを再認識。生徒にとってより良い一言を投げかけられるようになりたい。
 - ・私たちは、多様な価値観を示そうとしているつもりでも実はできていない。「何を」「どんな風に」の多様性だけでなく、その人が「いつ」自分を発見するかという点でも多様さを認めて行きたいと思いました。
 - ・生徒を大人扱いするか、子ども扱いするかで結果は大分異なる。
 - ・できるだけ寛大な扱いをして欲しいということ。
 - ・やはり相性があり、担任が一人で抱え込むのではなく、チームの話しやすい人を探すことがまず第一歩なのかもしれない。
 - ・中山先生の対応が伺えた点は大変新鮮だった。
いいえ1
 - ・予想していた答えが得られた
どちらとも言えない7
 - ・自分とどう違うのか、どういう所が共通するのかを考えていたので、あまり新しい視点は気にしていなかった。
 - ・なるほどと思うことはたくさんありました。特に附高生の実情について。
 - ・「先生が家に来てくれた」とあった。学校を連続して休んだりなどのことがないと家庭訪問もなかなかしづらいと思う。
 - ・「対応」という言葉はよく使われるが、どんな状況に対し、どんな指導をすることを指すのでしょうか。
 - ・対応はその時期、その生徒によって様々なので、必ずしも「新たに」と言えないから。
- 4 さらに質問したいことがあったら書いて下さい。
- ・精神科や神経内科のサポートが（投薬のためにも）必要な生徒がいるが、本人も保護者も行きたがらないことが多い。初めて医師にかかる時にそうした抵抗感はどうくらいだったのでしょうか。（医者にかかって好転した生徒がクラスにもいたので、どう進めたら良いのかいつも悩んでいたの。）
 - ・親子関係の変化について。高校の頃は保護者とうまく行ってなかったと思うので、どうやって「今は休養したいんだ」ということを親御さんに分かってもらったのか。
 - ・自分に向き合えるようになるまでにかかった時間は、他者の助けで短くなる可能性はあったのでしょうか。それともそのような短縮は必要ないのでしょうか。
 - ・親に変化はあったのでしょうか。
 - ・附高生にとって「東大進学」とは、どれ程のものなのでしょうか。
 - ・自分が赴任したとき、学校に慣れることに必死で、生徒のことを考える余裕はあまりありませんでした。
 - ・家庭では、欠席のとき何かプレッシャーになるような話はなかったのか。
 - ・幅広くたくさん事項を見て、テストを受けて良い点をとって・・・ではなく細かい所に執着して、関心のある所を調べるような姿勢を認めてあげられると良いのでしょうか。
 - ・S君は良き出会いをしていることがわかりました。前向きに歩むようになった最大の切っ掛けは、良き人との出会いだったのでしょうか。
 - ・足踏みしている時の過ごし方や大学に向けての努力方法など。
 - ・生徒に話をしたいと聞いていますが、生徒へのメッセージは何だったのか知りたい。
 - ・もし、もう一度高校生活ができるとしたら、どういう生活をしたいか。すると思うか。
- 5 その他（自由記述）
- ・「自分にウソをつくことは自分に呪いをかけるようなものだ」ということが印象に残った。
 - ・なかなか聞けない話を聞かせてもらい、いろいろと考える良い機会になった。
 - ・他の卒業生の体験も聞きたい。
 - ・附高の生徒特有の悩みを感じることができた。
 - ・病気とまで診断されなくても配慮しなければならぬことがあるように感じた。
 - ・非常に分かりやすい話でした。その裏には彼が今まで本当に色々ことを考えてきたということがあるのだと思う。私は高校生の時を知りませんが、当時の苦勞を冷静に振り返りながらおだやかに話す姿勢が印象的でした。

- ・病気と診断されているならともかく、病気と診断されていないけれど内面に苦しみを抱えている生徒も多いだろうと思う。(高校時代の自分もそうである。)
- ・附高ならではの問題も多い。「エリートを育てたい教師」という話があったが、生徒のエリート意識の高さに、不思議な生徒だな、不思議な光景だなと思うことが多い。
- ・林先生の話の引き出し方が大変参考になりました。生徒との面談でも対等な目線から受容と共感の姿勢でソフトに接して行くことが大切だと感じた。
- ・自分自身の病気のことを理解し、病気と上手に向き合いつき合って行くことができるかどうかが重要。高校生の段階ではそこまで自分をコントロールできないし、親も含め病気であることを認めたくないケースが多いと思う。学校や担任がうまくサポートし、少なくとも悪い方向に行かないよう指導して行くことが大切。(正解がないだけに難しいが)
- ・「人混みが嫌い」とか…今の生徒に共通する点もあり参考になりました。
- ・ケースバイケースなので難しいと思った。どんなドクターに会うかも難しいと思った。
- ・生の声を聞くことはとてもタメになります。またこのようなタイプの研修をお願いします。
- ・研修の時間は60分から90分が適切だと考えます。
- ・薬を飲む必要性(投薬によってあそこまで回復できたのでしょ)
- ・対話形式でなく自由に話したいことを話してもらった方が良かった気がする。2部の方が良い話が聞けた気がする。
- ・何故このような研修会になったのか、方法論の目的や事前協議をもう少ししたら、さらに充実したものになるような気がする。
- ・今までの経験の中で、学校を辞めることで精神的な症状が改善されたケースもあったと思う。引きこもり方も人それぞれだし、一筋縄でいかないことを改めて感じた。

今回の研修会は、アンケートの回収率が特に高かったことから見て、関心の高かったことがわかる。アンケートの中に、「あくまで一つのケース」という記載や「一般化しにくい」という記述があり気になった。事例の研究は、その中から、今の生徒に生かせるヒントを発見してもらうことが目的である。AだからB的な発想では、なかなか深まらない。答えのないことではあるが、一人

の卒業生の貴重な経験談の中から、困難を抱えた生徒の対応に生かせる何かを、見出して欲しい。今の生徒との共通点や附属高校での良さ出会いに焦点を当ててくれた方もいらした。先生方一人ひとりが、生徒の居場所になっていただければ大変ありがたい。

2-7 講演会の必要性

2-7-1 保護者向け講演会

保護者向けの講演会として、今年度は7月9日に東京大学学生相談ネットワーク本部精神保健支援室コミュニケーション・サポートルームの宮崎央桂先生に講演をお願いした。なお、保護者向け講演会に先立ち、本校の支援体制についても紹介している。早期に支援体制を組むにあたり、保護者の理解と協力は不可欠である。現在、保護者の方への情報発信として、年3回発行される泰山会報(PTA会報)に支援委員会の取り組みを紹介しているが、直接呼びかけられる講演会は、大変貴重である。

宮崎先生には、発達障害について医学的な所見とコミュニケーション・サポートルームの取り組みやその経緯など、東京大学で行われている先進的な支援体制を、エピソードも交えてお話しいただいた。以下にアンケートの結果を示す。

「発達障害の概要と東京大学の取り組み」

(宮崎央桂先生) アンケート (2011.7.9)

回収：1年(16)・2年(1)・3年(1)・不明(1)

1) 今回の講演についてどのように感じましたか。

大いに参考になった5 参考になった14

参考にならなかった0

(理由)

- ・「発達障害とは？」ということ初めて聞く方にも分かりやすく説明されていた。
- ・長男と比べて次男に多動傾向があるので、お話を聞いてドキドキした。
- ・身近に発達障害の方が数名いるので。
- ・コミュニケーションが苦手なこと、発達障害があることはちがうことがわかった。
- ・小学校で読み聞かせボランティアをしていて、特別支援学級の子供たちと接する機会があるから。
- ・甥(小6)が自閉症なので、自分の娘(小6)との接し方をどう変えれば良いかよくわからなかったから。
- ・身近に発達障害の子供はいないのですが、今日の話により少し理解できるようになった。

- ・東大生の中でも障害をお持ちの方がいることを知れたこと。
 - ・発達障害についてより具体的に解説下さり良く分かった。
 - ・小学校でサポートボランティアや放課後クラブに係っているため。
 - ・自分の子供（小学生）に当てはまる所があるといつも疑っているの。
 - ・発達障害が意外と身近なものであることがよくわかった。
- 2) 講演の内容について関心を持ったことがあれば書いて下さい。
- ・東大のみでなく、他大学や高校、中学とすそのを広く同じフォローが必要であるのに、サポート体制が整うのにまだ時間がかかりそうで残念。少しでも早くヘルプが入れば救われる生徒が多いのではと思う。
 - ・ADHD, 広汎性発達障害について。
 - ・線引きが大変難しいのではないかと感じた。
 - ・人との関わりについて不器用だと子供が心配になることがある。
 - ・発達障害ではないと思いますが、人との関わり方を子供が身につけるにはどうしたら良いのかと思う。
 - ・より一生懸命褒めようと思った。
 - ・良い所を本人だけでなく、周りを囲む人（親や先生）にも伝えようと思った。
 - ・東大生にも発達障害者がいることを知った。
 - ・漠然と知っていた発達障害について、分類して解説して下さったので、理解を深めることができた。
 - ・学力と関係がないこと。
 - ・東大全体で何人ぐらいの対象者がいるか？3カ所の保健センターで対応できているのか？
 - ・普通からPDDへの移行過程で特徴的なこと。
 - ・本当に人それぞれと思った。
 - ・発達障害に対する“つき合い方”は発達障害でなくても円滑に社会付き合いをする上で必要なこと、大事なことなのではないかと感じた。
 - ・発達障害の子供に対するつき合い方について。
 - ・親の接し方、兄弟の接し方はどうすれば良いのか？
- 3) 講演の内容について質問があれば書いて下さい。
- ・障害と健常の境目のグレーゾーンの子供たちにはどう接すれば良いのか？「障害があるから…」と接するのか、「健常なんだから…」と接するのか迷う。
 - ・教職員向けの啓発活動のようなことはされているのでしょうか？
 - ・東大以外の取り組み
 - ・個性との違い
- 4) お子様の学校生活についてお悩みのことがあれば書いて下さい。
- ・次男が小さき頃から育てづらい（こだわりが強い）。
 - ・部活動でいつも疲れ果て勉強に時間が取れず試験の結果が悲惨なのに、本人があまり応えていないのが心配。
 - ・一生懸命頑張る分、自分の思い通りに行かず行き詰まっている姿を見ることがあるが、高校生くらいになると、子供の悩みの中に踏み込んで行くことが難しい。
 - ・高1の娘は学校のことをよく話す小6の娘はほとんどしゃべらず、高1の姉にはしゃべっている。気にしなくて良いか？
 - ・今のところ楽しんで学校に行っています。
 - ・毎日、忙しくて、忙しくて大変なようです。もう少し余裕があると良いのですが…。違う言い方をすれば毎日が充実しているようです
 - ・現在のクラスメイトとは仲良くできているが、自己が強いで友人とのコミュニケーションを進めていく上で、これからも上手にできればと、親としては心配。
 - ・ありません。先生方のご指導に感謝しています。
- 5) お子様の日常生活についてお悩みのことがあれば書いて下さい。
- ・常に携帯電話をさわっております。中学まではメールもあまりしていなかったのですが、依存症ではないかと思う程です。
 - ・次女（小6）と三女（小3）はよくけんかをする。…普通のことでしょか？
 - ・今日の話を知ると「しかる」という事ができなくなってしまうが、子供を教育する中では「しかる」ことも必要では。
 - ・負けず嫌いな性格なので、それがプラスになる事もあれば、マイナスになる事もあります。上手な伸ばし方はあるのでしょうか？
- 6) その他（自由記述）
- ・病気としてではなく、子供の成長の中で悩みに親がどのように関わっていったら良いのか、親としての課題です。そういう関わり方を考える機会があったらまた参加したい。

- ・民生委員をしています。いろんな子供と関わっています。最近では小3女子の双子のお母さんが、双子の成長の差に頭をかかえ、「高校入試はどうしよう?」と悩んでいた。6年も先の事も気になるんですね。子供だけでなく、母親のケアも必要と実感しています。
- ・試験勉強できて東大に入っても「発達障害の子」っているんですね。医者、弁護士などの難しい試験を合格してもそういう人がいるっていう事ですね。勉強になりました。
- ・高校でこのような取り組みがあるのはとても有り難いと思います。
- ・記憶力が良い子供ほど、注意が必要な事に気づかされました。ありがとうございました。
- ・今日は実践に基づいた貴重なお話をありがとうございました。50分という時間が短く、もう少し具体的なケースのお話や発達障害の子供・大人と接する時のアドバイスなども詳しくお聞きできれば良かったです。
- ・宮崎先生のご講演も、宮城先生の支援委員会のお話も「あきらめない」という言葉が最後の方にあり、現代の社会にキーワードのなっているように感じました。
- ・宮崎先生のお話は障害のある子供に対してだけでなく、子育てひいては人間関係全体に共通するお話であったと思いました。常にゆったり、穏やかな対応、そして「手柄はすべて子ども自身のもの」という言葉を心掛けて行きたいと思います。
- ・生活に困らない程度の障害を疑っている場合、どう相談していいのかわからない。

当日は、1年生の林間学校前の学年保護者会があり、多数の参加者があったが、アンケートの回収方法が不十分で、多くのご意見をお伺いする機会を逸したのは残念である。回収できたアンケートを見ると、このような講演会を行うことの重要性を改めて感じた。

2-7-2 生徒向け講演会

新入生向けの講演会を5月23日に行った。前年度の1月21日に行った東京カリタスの家の臨床発達心理士向井崇先生の「みんなちがって、みんないい」という講演に対する生徒の反応がとても良かったことを受け、入学して間もない時期に新入生対象の講演会を実施してみることになった。向井崇先生の講演は、体験者を5名ほど決

め、それ以外の人は何を聞かれても「ガンダラムジムジ」としか答えられないという約束のもと、課題を行うというワークがある。体験者は「何を言っているのか分からない世界」でイライラや、心細さを体験するものである。なかなか他人の困った体験を意識する機会はないが、このワークで違和感なく困っている人の気持ちを体感できる。体験者にはどのように感じたか話してもらおう。また、全体には、縁取り無しの「ココロ」の文字の読み方体験があった。「補助線を引く」というほんの少しのサポートで、今まで見えなかった文字が見えて来る。このような思い通りにないならない体験は、困難の理解につながると思う。以下に、講演に対する生徒のアンケート結果を示す。

「みんなちがって、みんないい」アンケート集計結果

1) 今回の講演会はどうでしたか?

大変良かった	125名
良かった	161名
ふつう	41名
良くなかった	5名

<理由>

●実際に体験できて楽しかった、理解しやすかった

- ・「違い」を体験できて、とても面白かった。目に見える形で違いということが分かったので、とても理解しやすかった。
- ・「ガンダラムジムジ」など実際に体験した上で話を聞いたので、よく理解できた。
- ・人それぞれ当たり前だけど違いがあることをワークすることで、体験できた。
- ・参加型の講演だったので、飽きなかった。
- ・テーマは「ちがいを受け入れること」だったが、「みんな」と「ちがう」とき、自分はどのような心境になるかを工夫したゲームを取り入れてその場で体験できるようにしていたのが良かった。
- ・参加型で話もおもしろかったし、分かりやすかった。
- ・思ったよりも奥の深い内容で、いろいろな体験を通しての講演は話に入りやすく、楽しみながら聞いた。
- ・日々では感じるのが難しいけど、たまに思うことでもある。体験というのを実際試してみて、違いがある時の気持ちとかすごくよく分かった。
- ・自らもワークに参加することによって、人は違うんだということをより感じられた。
- ・様々な体験を通して、違うことがあるのだということがわかった。

- ・わりと重い問題なんだろうけれど、楽しいゲームとかを取り入れて楽しく聞けた。
- ・ガンダムジムジの実験で、協力者はコミュニケーション能力がない、または周りと違うという状況がすごくわかりやすく、ハッとした。
- ・心のバリアフリーという言葉につながる多くの実験がスムーズに行えていた。

●テーマについて、新たな気づきがあった、考えを深められた

- ・自分の本来の視点とは違った視点で物事をみることができた。
- ・普段、分かっていた「つもり」のことをよく考えることができた。
- ・普段は意識しない認知の違いについて考えられたので、良かったと思う。少しの違いでも、多数と少数の構図になると暴力的になることを実感できたと思う。
- ・日常生活の中ではあまり気づかないような難しい内容だが、楽しい講演で親しみやすくなり、よく考えさせられた。
- ・人は違って当たり前だし、「違い」を理由にして他人を排除したりしてはいけないと分かった。
- ・みんなとちょっと違う人の気持ちがよく分かった。
- ・発達支援という職に就いているからこそ伝えられる重みがあり、聞いていてはっとさせられることがあった。
- ・自分とは別の世界のことを知れた。
- ・相手が何か障害がある子でなくても、何かコンプレックス(?)や気にしていることがあるのだと改めて感じた。
- ・一人ひとりが違うのが当たり前なのだ改めて感じられた。自分とは違う他人、他人とは違う私、それぞれを尊重していけばいいと思う。
- ・少数派の立場に立って考えることを学んだ。
- ・違うということについて理解を深められた。でも、そのことを誤解してしまうことは危ないことだと思った。
- ・「自分らしくいればいい」という最高のアドバイスを頂けた。
- ・話を聞いていて、普段何も考えないで生活しているだけでも誰かを傷つけたり、嫌な思いをさせたりしてしまうことがあるのだと実感できた。
- ・人を理解するためにどうするべきか、というのがとても印象に残った。

- ・これからは心のバリアフリーを大切にしたい。
 - ・感性や考えることが人それぞれ違うのだということが分かった。
 - ・「違う」ということがどういうことかを考えさせられた。
 - ・「みんなちがって、みんないい」金子みすずさんの詩にある言葉だな、と思って見ていたのだが、どのように考え、感じることで、上の言葉の意味を自分なりに深めることができたと思う。
 - ・「ちがいが」についてよく考えることができた。障害の方の気持ちを少しわかったような気がする。
 - ・人それぞれの違いを認めることの大切さを理解できた。
 - ・他の人とうまくコミュニケーションがとれなかった時のこわさが少し分かった。
 - ・自分の意見を上手に言えなかったりする人の気持ちについて、初めて真剣に考えることができた。
 - ・小さな違いでも当の本人はとても気にしているということはよくあると思う。そういうことを皆が知ることができて良かった。こういう道徳的なことを考える機会があるといい。
 - ・一人一人の個性を認め合い、尊重することの大切さを学んだ多くのことを再確認し、また新たなことを知るよい機会となった。
- 「違っていい」ことがわかった
- ・「ちがうのが当たり前」と分かった。
 - ・自分に自信がもてた。おもしろい。
 - ・「みんなちがってみんないい」ということを実感できてよかった。
 - ・この学校の人々は頭がとてもよく、少しショックを受けるところでした。しかし、私には運動や他の面で長所があり、そこを今後大切にしたいと思いました。
 - ・他人との瑣を個性として受け入れることの意義がわかった。
 - ・皆、周りの人と違って嫌う人もいたので良かったと思う。
 - ・僕とはものの感じ方などが違う人であっても、ちゃんと受け止めないといけなくて改めて考えさせられた。
 - ・人、一人ひとりが平等に尊重されているというメッセージが良かった。
 - ・人、一人ひとりの差異を肯定してくださる内容で、安心できる部分もたくさんあった。

- ・人間はみんなちがうから、そのちがいを十分に理解することが大切だということがよく分かった。実際に体験もあったので、楽しかった。
 - ・同じ人間は存在しないのだから、「ちがい」は当然であり、それによって誰かと自分の間に線を引くのは良くないと思った。これからも広い心を持ち、人との「ちがい」を受け止めてゆきたい。特に、見えるように具体的に肯定的にということを大切にしたい。
 - ・ちがう＝だめではないと改めて感じる事ができた。
 - ・普段、他の人との違いについてあまり意識していなかったもので、改めて違いがあることは普通なんだと思えた。
 - ・自分も、体験してみようのところで、グルグル回って見えなかったのを「ココロ」が見えなかったので、心細い気持ちがわかった。少人数の人のことも気づけるようにしていきたい。
 - ・「人と違うこと」の意味を深く考えられた。
 - ・周りの人よりも自分が劣っていることがあっても、「みんなちがう」「自分は自分」と考えれば良いと思えた。心が軽くなった。
 - ・僕は考え方が周りとは違うことが多く、なかなか自分の意見が通らないことが多かったのだが、「違い」はあって当然だし、自分一人だけが違うというわけではないと知れた。
 - ・個性の価値がわかった。
 - ・人それぞれ個性があり、違いがあるのだという当たり前で忘れがちなことをワークなどを通じてあらためて考えることができた。
- 共感できた、今後役に立つ
- ・心にひびいた。
 - ・話を聞いて、とても共感できた。
 - ・変化、違いを受け入れることは大事だから、この講演は大切だったと思う。
 - ・講演内容が今の私たちにとってなかなか心にくるものがあった。
 - ・時期的にも（学校に慣れてきてテストも終わって）自分に自信を持たせるという内容は合っていて良かったと思う。
 - ・最近は人間関係をうまく作ることができないと感じる人も多いようなので、今後の生活の糧となる内容だった。いくら気持ちが楽になり、1つ壁が低くなったような気がする。
- ・自分の生き方の指針になった
 - ・人と人の間に発生する壁を取り除くヒントなどが得られた。
 - ・共感できる部分がたくさんあって、実際、今の自分に生きそうなこともあった。
 - ・みんなそれぞれの「個性」があるので、その「ちがい」について責め合うことは悲しいことだと実感できた。
 - ・高校生活に慣れてきて、さまざまな変化に気づき始めた最近にぴったりのテーマで聞き入った。
 - ・社会の中で困っている人の気持ちを考えるきっかけになった。
- 話がおもしろかった、理解しやすかった
- ・普通に面白くなった。上手く引き込まれた。
 - ・「違い」についてくどくど説教するようなものではなく、実際に（本当の障がいなどとは違うものはあるが）感じる事ができた。
 - ・内容もわかりやすく、ユーモアもあってまた聞きたいと思えるような講演だった。心を軽くしてくれる内容だった。
 - ・講演者の話が面白かった。大切なことをまとめて話してくれたので、わかりやすかった。
 - ・現代の人間たちに平和のために必要なことを教えてくれた。
 - ・今までこのような講演会を体験したことがなく、良い経験ができたから。
 - ・ガンダラムジムジのくだりと、双子のくだりがおもしろかった。
 - ・楽しかったし、すごく良い話だったと思う。心がきれいになった気がする。
- 講師が良かった
- ・向井先生の愛想が良かったから。
 - ・向井先生のキャラが面白く、笑いが絶えなかった。
 - ・やっぱり「皆とちがう」という人たちと直接関わっている人から話を聞いたことは、とても大切なことだと思う。
 - ・講師の方が大変すばらしかった。飽きずに聞くことができた。
 - ・実際に仕事としていろいろな人と接している人からの話を聞いて良かった。
 - ・心のことで、かたいことなのに、講師の方が面白く、きさくな方で、きいていたのしかかった。
- 物足りなかった
- ・ごくふつうのことを言っているように思えた。

- ・確かに面白い講演ではあったが、内容が少し子供っぽい気がした。
- ・実験とかがあつて楽しかったが、もう少し色々な話とかをしてほしかった。
- ・元気がでた
- ・元気がわいてきた。
- ・元気がわいてくる、良い講演だった。

● その他

- ・多数派の人間に対し、少数派への理解を深めるように説明していたところは良かったが、少数派の弱者に対するアドバイスのようなものがなかった。
- ・コミュニケーションのコツがわかった。
- ・ココロが読めなかったのは辛かった。基本おもしろかった。
- ・ちがいを実感する体験がいくつもあつて良かったけど、自閉症について聞きたかった。
- ・「変わっている」と言われるのは必ずしもイヤなことじゃないと思うが。

高等学校の3年間は、まさしく子どもから大人へと成長する時である。自我が芽生え、それを確立して行く過程で、自分と他人の差が気になったり、周りからの評価が気になったりする。困っている人のつらさを理解したり、他人と違って当たり前と認識したりすることは、日常の中で経験することはなかなかできない。講演会の中で、困難の疑似体験をする機会があったことは、大変価値があることと思われる。

2-8 総合講座での取り組み

2-8-1 総合講座「自己理解と他者理解」より

平成22年11月22日に行った「ICTを活用した各教科の授業」というテーマの情報教育公開研究大会の中で、2年生の総合的な学習の時間の中で行った「自己理解と他者理解」の講座の授業を行った。総合的な学習の時間の中で行う講座は、学年により取り組みは異なるが、56期では、学習旅行に関連したテーマの講座を中心に、67種類の講座が開講された。私が担当した「自己理解と他者理解」という講座は、ちょっと異色なテーマの講座である。この講座の生まれた経緯は、総合講座の担当者から、講師の集まりが悪いとの連絡があり、私が学年主任でもあることから、5つほどの違ったテーマの講座を生徒の希望があればやっても良いと立ち話をしたことに始まる。「自己理解・他者理解」なんて希望する生徒はいないだろうなという甘い考えがあつた訳だが、なんと

45名もの希望者が集まったとの報告を受けた。高校生にとって、実は「自己理解と他者理解」というのは、実に関心があるテーマなのだと初めて分かった。それから、どのような方法を使って、テーマに沿った話をするか約3ヶ月悩み続けた。高校生の真摯な思いに答えるには、あまりにも理解不足だったとの後悔の始まりである。特に、「他者との違いに違和感を持ちながら悩んでいる生徒」、「自己の個性が強すぎてクラスになじめない生徒」、「こんなハズではなかったと負のスパイラルに陥りもがいている生徒」などの、気持ちが軽くなるような取り組みをできればと考えたとき、自分の気持ちを悟られずに、他人の気持ちが分かる機器としてターニングポイントの活用を思いついた。早速56期の講座の中で、「アンサーカードのボタンを押すときが『自己理解』で、集計が映し出されたのを見るのが『他者理解』である」と説明し使ってみた。生徒にとっても好評だったので、昨年の情報教育公開研究会に続き、今年11月5日に行った公開研究大会の中でも授業を公開してご意見を伺った。なお、今年は57期の学年の意向から、講座の振り返りの時間を設定して2時間の取り組みとなった。

2-8-2 公開授業を振り返って

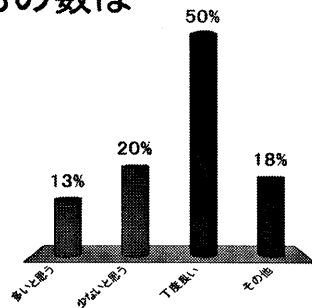
「自己理解と他者理解」のキーワードとして、「感じ方にはズレがある!」「それぞれ違っていい!」の2つの言葉を始めに提示した。また、ICTの活用として、アンサーカードのボタンを押すときが「自己理解」で、集計が映し出されたのを見るのが「他者理解」であると設定して授業を進めた。さらに、自己理解と他者理解の助けとなるワークに、ブリーフセラピーのワークを導入してみた。

これらの発想の基盤になっているのは、一昨年参加したフィンランドへの視察研修の時、高校1年生の心理学の授業を見学したことと、昨年の夏に参加した上智大学でのカウンセリング講座でのブリーフセラピーについての研修である。また、平成19年度から平成20年度に取り組んだ「高等学校における発達障害支援モデル事業」が役立っている。

以下に総合講座で行ったアンサーカードを使った「友達の数」についての質問についての集計結果を示す。はじめの集計で、今の友達の数は「丁度良い」と答えている生徒が50%いる。「多いと思う」13%、「少ないと思う」20%となっているが、その判断基準の「理想の友達の数」は大きくばらつきがある。

・今の友だちの数は

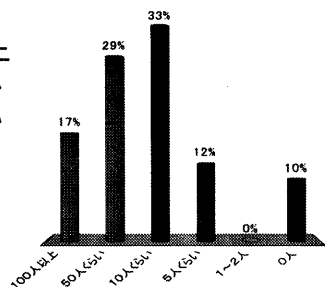
1. 多いと思う
2. 少ないと思う
3. 丁度良い
4. その他



(スケーリング)

あなたの理想の友達の数は？

1. 100人以上
2. 50人くらい
3. 10人くらい
4. 5人くらい
5. 1~2人
6. 0人



・スケールは人それぞれ/悩まなくていいのでは？

このようにそれぞれがいろいろの考え方をもっているということが分かれば、「友達が100人以上」と理想が高くても友達の数が少ないと悩む必要がないのではないかと提案した。また、むしろ一人で過ごす時間も大切なのではないか。このように思い込みで固定化されたスケールを確認してもらうことで、今までと違った視点で物事を考えてみる経験になればと考えている。

2-8-3 研究協議会より

この公開授業は、「総合」というカテゴリーになっているが、授業設定の意図は、「高等学校で必要とされる早期支援」の一環となることができなかつたという気持ちである。そのため、協議会の助言講師には東京学芸大学教育心理学講座准教授の松尾直博先生を、また、記録として本校養護教諭の籠谷恵先生をお願いした。以下、協議会での記録の一部を示す。

<質疑>

- ①意見：ターニングポイントは、普段恥ずかしくて言えないことを、その場で集約できて良いと思った。さらに、深い内容の選択肢があつても面白いと思った。
- ②質問：生徒が書いているワークシートの感想を見て、同じ人としか話せないのが残念とあつた。今回のグループワークはどうやって決めたのか？

答え：自由に座っていいとあつた。男子が3人あつたので、少し調整した。もっと意図的にやってもいいかもしれないが、あまり拘束しない形であつた。

- ③質問：高等学校では、どういうふうはこのテーマを進めていくのか興味があつた。人との関わり方で進めていくのかと私は最初見てあつたが、はじめに進路というテーマを提示したことで、生徒達にとっては自分が今考えなければならぬテーマに沿って考えられ、理解が進んだのではないかとあつた。

答え：今日は進路というテーマで授業をしたが、授業をやる時期によって、違うテーマを設定している。例えば、同じワークシートでテニス部の合宿前に、自分の持っているリソースは何かというように使つたことはあつた。「自己理解・他者理解」というテーマで最初から進めると難しいので、学習旅行などいろいろな要素を入れている。

- ④質問：モデル事業の報告書などを見た上で、今回参加した。以前生徒にアンケートをとつた時に、対人関係やストレス、自信がない生徒が多くあつたが、今日は自分のリソースを話す時はしっかり話せてあつた。改善点や成果はどのようになつているか。

答え：生徒達はリソースについて楽しそうに話してあつたが、このような経験はあまりないと思う。以前、研修で自分も経験したことが今回の授業に取り入れたきっかけである。1分間も続けてほめられたことではないのではとの思いで授業に取り入れた。

- ⑤質問：自尊心という言葉は、子ども達は理解できているか。内的資源と外的資源などの言葉の共有は？

答え：言葉の共有はしてない。

- ⑥質問：初めてこのような授業を見た。自分でこのような授業を総合でやると大変だと思つた。授業にあたり、ポイントになるようなところがあれば教えてほしい。

答え：中には人間関係が苦手な、集団に入れない子もあつた。最初は、抵抗感が少なく授業に入つていけないのではと思つた。今日ははじめに進路の話題から入つた。専門的な言葉は使わないでやつていくこと、言葉をうまく生徒に伝えられればというところは、これから改善していきたく思つている。

- ⑦意見：生徒がワークシートをどんどん書いてあつたことにあつた。理解も早くあつた。ストレスの質問の時に、「何事にも自信が持てない」を選んだ生徒があつたが、ある程度学力はあると思つたが、何に自信が持てないのかなと思つた。

答え：本校の生徒は中学までは学校のトップでやつてくるが、高校に入るともつとできる人があつて自信をなくしてしまうことがある。もちろん全然ダメではないので、そこに気づいて欲しいというところがあつた。

る。

- ⑧意見：知的障害を持った生徒が通う学校で教諭をしている。本校でも総合的な学習の時間があり、自己理解・他者理解に関する授業をする。今日はいろんな機器があり、勉強になった。普通の高校生と接していないので、「人にこういうことを言ってあげられるんだ」とか驚きがあった。書かせたことについて、つい確認しなくなってしまうところもあるが、子どもに書かせて（回収せずに自分で）振り返らせるというのもできるのだと思った。
- ⑨意見：みんななかなか自分のことが分からないので、リソース、長所を答えるのって難しいと思うが、話しながら書けるのがすごいと思った。そういうところを出せるのって大事だと思った。私が持っているクラスに長所を言えない子が多い。自己理解を深めていくことで、長所を深めていけるのではと思った。
- ⑩意見：子どもから大人まで学べる授業だったと思う。気づいたこととして、1点目は、「人は誰からも好かれなければならない。」という質問で、先生が「どうだった？皆と同じだった？違う回答だった？」と言った時に、ざわざわしていた生徒がシーンとした。いろいろ感じながら授業を受けていると感じた。2点目は、「親に注意されると頭に来る。」という質問の後、先生が親御さんに「子どものことを頭に来る」という質問をした時のグラフを出した時に、生徒さんオーツと盛り上がったところを見ると、自己と他者のテーマ、こういったアプローチの仕方を第三者からアプローチする（今回は子どもと親というテーマで）、歩み寄りができるのではと感じた。
- ⑪意見：今回の授業では、「生徒を大切にしているな」と感じたし、あたかも私たちも大切にされているように感じた。端々の気遣いの言葉がすばらしいと思った。「書いたものを集めないからね」と言われると、子どもが安心できる。そういうところが随所でみられた。また、行うことの意味付けがされていた。「今からすることはこういうこと」という声かけや、子ども達を感じたことに、「こう感じた場合はこうだよ」と。負のことも否定しないで、いろんなことを感じていいとわかった。ターニングポイントもいいタイミングで切り替わった。私も欲しい。人を気にせずに意見が出せるし、パーセントで出る。これだけのたくさんの内容を子どももついてきていて、能力が高いと思う。リソースについて、「周りに私は良いところはない」という生徒に対して、他の子が良いところを言ってあげてい

た。所属感というか、周りが支えている形があった。

<助言講師からの講評>

授業は附属高校の実態が出ていた。最初思ったのが、心理療法のナラティブ、PSHEに近いと感じた。ナラティブは、日本ではまだ新しい発想で、パラダイムシフトが伴うような考え方。一人一人のストーリーを大切に作る、生きる支えとなる物語。苦しい状況にある子どもや、大人も希望をもって歩みだせるようにというもの。今回の授業で先生が取り入れたブリーフセラピーと、ナラティブは関係が深い。

附属高校は相対的に高い学力だが、附属高校の中で相対的にみると、自分より学力が高く、かっこいい、かわいい、気の利いたことが言える生徒もいて、それに対してもすごく劣等感を感じる生徒がいるので、それを変えていかなければならない。能力的には高いが、授業中の質問で「友達0が理想的」が10%おり、人より物に魅力を感じる子もいる。だけど、彼らはやれてしまうので、本当はテンションを上げたくないけど、周りに合わせたりしてしまっている。今回の授業は、そこを揺さぶって、もう一度作り直そうという作業だった。あなたの物語、固まって否定的なところを揺さぶる仕掛けをいっぱい入れていた。私が立っていた場所の近くのグループの女子はずっと話していた。授業に関することについて、話したくて仕方ないようだった。実際、生徒は自分をあまり振り返ったことがないと思う。また、場合によっては保護者に「悩むのが弱いやつだ」「時間の無駄だ」と言われているケースもある。そういう子ども達なので、リソース、ソースの言い換えがおもしろかった。ベアワークではないが、周りが言っていた。ほめるという活動の前に、あなたは「ハイスペック」「やる時はやる」と。言われた方は「うれしい」「ヤバい。本気で照れる。」と言っていた。「ここに長所があったのか。ここにも自分のリソースがあって、今まで注目していなかったけど」というところを揺さぶったり、ストーリーの背景にあるものを見つめることが大事。それから、授業はずっと心理学的に展開されていったが、最後に人生の格言が出てきた。感情、認知に焦点を当てるが、ナラティブは最後に価値観に焦点を当てさせる。そのこと（最後の格言）を感想で良かったと挙げている生徒が結構いた。自分のストーリーを揺り動かされた後に、焦点がしぼれるというか、価値観、自分の物語、人生観をつくっていければ、たとえ人と違って、それが自分が生きる物語なのだと。やっとな自分の哲学が見つかるというか、（附属高校の中で）相対的にはイケてなくても、それでいいのだと。そ

ういう揺らす仕組みがあった。

次に、PSHEについては、イギリスでは準必修科目で行われている。キーステージ4が高校生に該当し、アイデンティティや自己理解、他者理解、多様性などを扱う。現代は、知識基盤は個人としては、大量の競争に流される可能性があるが、多様な価値観を持った人といかにつき合うか、授業として系統的に教えようとしている。日本の高等学校の総合でも、このような授業を取り入れるのは必要であると考えている。今回の授業では、例外探しのところの少し前で、生徒が「金曜の夜って間違えなくやる気が落ちる。日曜の夜になるとやる気が出る」と話しており、自己モニターでき始めているのを感じた。自覚できたり、話したのは初めてなのかもしれないし、授業で話があったから触発されたのだと思う。最後の評価でも、自分を振り返る機会がなかったから新鮮だったという意見があった。それから、2時間目の最初に「理想の友達の数は何？」という質問があった。この高校もそうだが、生徒にとっては重大問題で、この質問が最初出た時に、生徒が「えげつないね」と言っていた。しかし、一番答えにくそうだったが、一番他の生徒の反応を知りたがっていた。そのため、授業では1時間目は進路で良かった。最初に友達のことだと授業のテンションは違っていたかもしれない。「100とか親友かな」といったそういう話が触発されていた。普通は高校の男子がご飯を食べながらそんな話はしない。「親友のつもりで答えているのかな」「100人と深くつき合うのは無理だよ」「100人と軋轢ができそう」と。

また、「子どもが思い通りにならないと頭に来る。」という質問があった時、生徒からは「やばい」「親の姿が浮き彫りに・・・」という発言があった。最後のアンケートでは、「親の考えがもっと知りたい」という意見があった。これは、心理学的にも重要で、一番最初の他者は親だと言われている。今回、「親の期待が大きい、親と意見が合わない」という質問に対して「あてはまる」が0%だったが、こちらとしては、これでだまされてしまう。先生方や友達にも言っていないが、親の期待につぶされそうになっているところはある。他者理解として、他の親を知ることによって自分の親を知ることになったり、自分の親って少数はなのかもしれないと気づいたりすることができた。

次に、特別支援教育全体でいうと、1次予防が重要だと言われている。今国会で企業のメンタルヘルス対策を義務づけるべく検討がされている。最近では、メンタルヘルス検定大人気で、セルフケアコースというものがあ

る。このセルフケアをすべて受けさせている企業もある。附属高校には健康度の高い生徒も多くおり、その生徒が仲間を支える子になってほしい。仲間を支えたり、アドバイスをしたり、仲間が物語を作っていく支えになって欲しいと考えている。(文責：宮城政昭)

3 早期支援と学習支援

3-1 個に応じた早期支援

近年、不規則登校、不登校、保健室登校の生徒の増加が顕著である。その原因は明らかではないが、厚生労働省が発表している「気分障害の総患者数」の顕著な増加と連動しているように思える。厚生労働省政策レポート(2010年7月)「自殺・うつ病等対策プロジェクトチームとりまとめについて」によると、平成8年には43.3万人だったうつ病等の気分障害の総患者数は、平成20年には104.1万人と12年間で2.4倍に増加した、とある。しかも、「患者調査」は、医療機関に受診している患者数の統計データで、うつ病患者の医療機関への受診率は低いことがわかっており、実際にはこれより多くの患者がいることが推測されるという。

授業に出られない生徒には、何らかの精神疾患の診断を受けているものが少なく無い。現在本校の「支援」は、このような生徒への対応に追われているが、これといった打開策は見えていない。特に、事態が悪化してからの対応となりがちで、すでに生徒に学校ができる有効な支援をする機会が失われているように思える。私たちの手の中に生徒がいないのである。このためには、早期発見と個に応じた早期支援が必要である。

2009年度本校研究紀要「高等学校における「発達障害支援」の具体的な取り組み」(支援委員会)の「6特別支援と評価」に、その特別支援対象者について次のように書かれている「本校では、特別支援対象生徒を発達障害の有無によってはいない。特別な支援を要すると認められた生徒は、すべて対象としている」。また、「個に応じた評価の必要性」「評価と指導の一体化の重要性」についても述べている。支援を必要とする生徒に対して、個に応じた学習指導、個に応じた評価をすべきであるとするのである。しかし、その目標設定、指導方法の確立、評価方法の確立は、きわめて困難である。

一方で私たち教員は、日常的に個別指導、個別評価を従来から行ってきているのではないかとも思える。このこと自体が、予防的早期支援となっているのではないだろうか。そのような従来の学習・生活指導方法の見直しから、現実的な個に応じた学習支援の可能性を探りたい。

なぜなら、時間も人も限られた中で、何かを付け加えるのではなく、現状を改善することによって対応していかなくては、本校を含む多くの学校での学習支援の参考とはならないからである。

小、中学校では、学習支援員という制度も導入されている。本校でも放課後に行われている「お茶会」の中には学習支援的要素もあり、科目によっては大学院生などの協力によるTAによる支援も実施されている。また、物理（川角）は、毎週月曜日の放課後を物理質問・相談・補習時間として、誰でも受け入れる時間としている。これらは、意識次第で個に応じた学習早期支援となる。学習支援を現状の学校資産で対応することは、視点の転回と工夫次第で可能性はある。

3-2 支援生徒増加原因を研究すべき

怠惰なためではなく、授業に出られない生徒の原因は単純では無いだろうが、出席が常ならぬ生徒が増加していることは確かである。早期支援も重要だが、それ以上に、支援生徒についての分析が必要である。このためには、先行研究と現場教員が感じている直感とに基づいていくつかの仮説をたて、研究していく必要がある。

貝谷久宣は、その著書「気まぐれ「うつ」病」（ちくま新書）のなかで、全国民の5%は一生涯のうちに非定型うつ病にかかる可能性があるとして述べている。支援対象となっている生徒が、みな非定型うつ病というわけでは無いだろうが、本校生にも社会と同様の傾向があってもおかしくは無い。

すべての欠席生徒についての一般論はいえないが、気分障害が欠席につながっている生徒も、少なからずいると思われる。何らかのきっかけ（ストレス）とうつになりやすい性格が関わるのかもしれない。その性格について、関谷透はその著書「「うつ」かなと思ったら読む処方箋」（日本文芸社）の中で、「執着性性格」や「メランコリー親和型性格」をあげている。これらには、「やるべきことを何が何でもやらなければならない」という思いが強い、「几帳面で正確さにこだわるあまり、少しでも妥協できない」といった特性がある。現在の支援生徒の多くに、この傾向が無いだろうか。また、先に上げた関谷氏の著書にある青年期前期に見られるという「ふれあい拒否症候群」（両親の過保護の影響で、対人関係が不得手）も気になる。

本校入学生徒は、それなりの学習成果を挙げた結果、入学してきている。したがって、通常の学習に関しては、それぞれ何らかの方法で乗り越えてきているはずで

ある。また、中学校までにリーダーとして活躍していた生徒も多い。これらの生徒は、親や先生の言うことをよく聞き、几帳面に正確にやらねばならないことをやり通すことができた生徒だろう。リーダーとなること自体も、親や先生の要請に応えたものなのかもしれない。

このような生徒たちが、本校に入学して高き目標に向かうとき、現実と目標のギャップ（本当にギャップがあるかどうかは定かではないが）による、慢性的落胆がゆっくりとした長期ストレスをもたらし、気力の低下をもたらしているのかもしれない。

このような生徒たちが、本校で支援を必要とするようになっていたとしたら、本校の入学者選抜システムや、入学後の教育方法自体に再検討が要請されることになる。

3-3 目指すべきは早期支援以前

支援生徒の分析・研究をするにしても、現状は待ってくれない。何をすれば、授業にでられない生徒を生み出さないで済むのか分からない。しかし、目指すべきは早期支援すらも必要としない生徒を育てることである。このためには、柔軟で多様な授業スタイルや評価方法を用意できれば、どこかで生徒が救われることがあるのでは無いだろうか。入り口も出口もたくさん用意しておくのである。

このとき、今後の研究として必要なのだが、経験的に以下のような内容の検討が必要ではないかと考える。

- ①学習を受け入れる能力の成長と学習量と進度とのミスマッチングの発見と改善
- ②自己評価ができる自立した学習者の育成
- ③人間関係構築の自然なトレーニングとなる特別活動や個別学習からグループ学習へのスムーズな移行
- ④親からの自立支援
- ⑤限りの無い達成目標となってしまうための適切な個人的達成目標の提示
- ⑥人と関わる社会で生きていけるために学習を自ら継続進化させる力の育成

3-4 残されている支援

これまで述べてきた支援を必要とする生徒のほかに、忘れてはいけない生徒がいる。一つは、通常支援としての大多数の生徒の学習支援の充実である。通常生徒にも、十分な支援を得られるサービスが保証されるべきであろう。

もう一つはハイタレントの生徒への早期支援である。

彼らには、伸びるきっかけと伸びたくなる高さ目標を与える必要がある。

すべての生徒のために、個に応じた学習の早期支援を実践とともに展開していく必要がある。

(文責：川角 博)

4 生徒指導から見た必要な早期支援

4-1 はじめに

ある学年では362名の入学者に対して、途中退学が3名であり、359名が卒業した。途中退学者3名のうち、1名は2年秋からイギリスに留学し、そのままイギリスの大学に進学したことによるものであり、別の1名は中国の大学に短期留学しており、高等学校の卒業認定試験も合格できている。この事実を加味すると、入学者のほぼ全員が卒業（に準じた支援が）できたと考えてよいだろう。入学当時、特別支援委員会（当時）は「入学した生徒が全員卒業できる」ことを仮説とし、その実現を目標に支援方法を考えていた。ここでは、その支援の実態とその成果、今後の課題を述べる。

4-2 支援対象者の概略

卒業までの3年間の中で、支援委員会から支援対象者とされた生徒は7名であった。その7名の概略を以下に挙げる。

- 支援対象者 A 3年2学期から欠席が急増。鬱病と診断。
- 支援対象者 B 進路希望に隔たりがあり、特に母親と衝突が絶えない。2年後半から欠席が増え、3年になってから欠課が急増した。
- 支援対象者 C 1年からの食事制限で拒食症。校医の指導により受診。
- 支援対象者 D 中3で父親が病死、拒食。バイトに熱中し学力不振。
- 支援対象者 E 転居がもとで、3年2学期から鬱傾向で不登校。
- 支援対象者 F 家庭のプレッシャー、クラスメートの嫌がらせから不登校。
- 支援対象者 G 1年後半から欠席が増え、2年は授業を全欠、保健室登校

4-3 それぞれの支援対象者の支援の実態

4-2に挙げた7名の支援対象者の支援の実態を簡単にまとめる。

4-3-1 支援対象者 A の支援の実態

3年の辛夷祭までは時折欠席があった。欠席の原因は保護者とのトラブルであることは生徒との面談で把握できていた。辛夷祭以降欠席が急増し、10月初旬の保護者会で母親から欠席の事情を聞くことができた。夏休みに入ってから、塾に通うことができなくなり、無理に通おうとした際の言動や行動がおかしいことから、心療内科に通院し、鬱傾向であることが分かった。

主治医と2度連絡を取り合い、1学期にほとんど欠課がなかったことから、無理をさせずに欠席させて治療をすることとし、生徒本人と保護者にその見通しを伝えて、2学期はほぼ欠席させた。3学期の登校への準備として、冬休みに数度登校させ、化学の実験をしてもらった。主治医との相談でセンター試験は受験させることとした。3学期は相当数の授業に出席することができた。履修ができたことを成績会議で確認し、単位の認定と卒業が承認された。

4-3-2 支援対象者 B の支援の実態

2年に入ってから特定の教科科目で欠課が増える傾向が見られた。当初は、部活動を熱心にやる反動で疲れたり、腰を痛めたりしたことによると考えていたが、2年後半から欠課が急増した際の面談から、保護者と本人の進路に対する考え方が高校入学当時から大きく異なっていたことがきっかけであることを知った。3年へは教務規定に定める範囲内の欠課で進級できた。

3年に進級してから欠席がさらに増加した。本人保護者との面談で、本人が保護者の前で初めて本音を語る。このことで事態が好転するかと思われたが、本人が希望した中国への訪問が実現できなかったこと、部活の実績を生かした推薦入試の受験が果たせなかったこと等から欠席が減少せず、卒業はできなかった。学級担任の指導により、高卒認定試験を在学中に受験し合格。その資格を用いて中国の大学に短期留学している。

4-3-3 支援対象者 C の支援の実態

本人の極端なカロリー制限により体重が急激に減少した。保健室から、きちんとした食事をとるように指導したが、状況が改善されず、生死に関わると判断して支援対象者とした。2年の健康診断の際に校医に協力してもらって健康相談を行い、その結果を元に管理職が保護者と本人に通院治療をするように促したことから、本人が納得して通院するようになった。少しずつ体重が戻り、学校生活も問題なく過ごせた。欠席欠課はほとんどなく、

進級卒業には全く問題が無かった。

4-3-4 支援対象者 D の支援の実態

1年の2学期後半から欠課や遅刻が多くなった。授業担当者から見ると、アルバイトに夢中になり授業をおろそかにしているようにしか見えなかったが、中学時代に父親が病死し、本校を受験するときに勉強に集中しすぎて拒食症となっていたこと、1年前期に勤めたHR委員でクラスをまとめられなかったこと、母親との確執等が原因であると報告された。2年になってから保護者や本人との面談を繰り返し、本人を励まし続ける支援を継続することで欠課や遅刻が減少し、3年に進級する頃には特に問題がないと判断される状況になった。進級卒業には全く問題がなかった。

4-3-5 支援対象者 E の支援の実態

2年までは欠席遅刻も無く成績も優秀で、特に問題のある生徒ではなかった。3年の1学期に足の捻挫の治療経過が思わしくなかったことから欠課が始まった。事情を聞いていく中で、3年進級時の住環境の変化が学習へのストレスになっていることが分かった。保護者への協力を依頼し、医療機関への受診を勧めていった。2学期に入って症状が重くなり、医師の診断が鬱傾向となったことから、無理をさせずに休養させることとし、生徒本人と保護者にその見通しを伝えて、本人の負担のない範囲で登校させるように指導した。センター試験受験後は全ての授業を欠課することになったが、履修ができたことを成績会議で確認し、単位の認定と卒業が承認された。

4-3-6 支援対象者 F の支援の実態

2年後半から保護者の進路に対するプレッシャーから時々欠席をすると報告されていたが、3年までは特に問題のある生徒ではなかった。5月中旬から欠席が続き、1学期は学校に出てくることができなかった。2学期になって学校に出てくることはできるようになったが、教室で授業を受けることができず、保健室か教科の準備室で自習することがほとんどであった。主治医との連絡の中で、クラスの生徒との人間関係が教室に入れない原因の一つであることを聞き、その改善に学級担任と学年が努めた。完全にHR教室に戻ることはできなかったが、授業への出席は徐々に増加した。履修が認められる欠課数ではなかったため、それを補う授業が授業担当者によって行われ、提出された課題を勘案して、他の生徒よ

り遅れたが単位の認定と卒業が認められた。

4-3-7 支援対象者 G の支援の実態

1年の後半から欠席が増えた。当初、部活動の人間関係によるものと考えられていたが、保護者との確執、クラスでの人間関係等も関連することが分かり、支援対象とした。2年には何とか進級できたが、2年に入ってから学校に登校しても授業を受けることができず、保健室や教科研究室を訪ねることしかできなかった。2年の辛夷祭の手伝いをし、担任と辛夷祭の見学をするが、それ以降は学校に登校することも少なくなっていた。通院の結果、統合失調症の疑いがあることが判明し、保護者の判断で休学することとした。休学中も時々学校に登校し、保健室で過ごすこともあった。本人は復学を希望する気持ちもあったが、保護者と主治医の判断もあり、他の生徒の卒業と同時に退学することとなった。

4-4 支援対象者への支援方針

支援対象者 A～G の支援が全てうまくいった訳ではなく、無事卒業できた者から退学した者まで様々である。また、生徒の対応も一律に同じようにできたかという点、多少の相違があったことは否めない。しかし、支援の根本的な方針は崩すこと無く、3年間貫けたと考えている。その基本的な方針を箇条書きでまとめたい。

- 1) 学級担任で抱え込まず、学年会で情報を共有し、支援対策を学年全体で考えたこと。
- 2) 必要なときは、保護者面談や三者面談で学級担任だけでなく、学年主任、養護教諭、生徒支援コーディネーターにも同席をお願いしたこと。
- 3) 最終的な局面や指導（支援）方針が大きく変わる場面では、保護者と本人を一同に会する形で話を聞いてもらうように努力したこと。
- 4) 支援方針は、コーディネーター、養護教員、学級担任、学年主任等の支援チームで話し合っ決定し、学年の意向で支援を進めないようにしたこと。
- 5) スクールカウンセラーとの相談会で得た情報は、学年会にフィードバックし、必要に応じて学級担任とスクールカウンセラーとの面談をお願いしたこと。

支援対象者の多くが卒業まで到達でき、卒業後も少しずつではあるが、回復の兆しを見せているのは、従来と異なる支援方針を継続できたことと考えている。

4-5 生徒支援の課題

3年間の生徒支援に課題が無かった訳ではない。具体

的な事例を挙げて、その問題点を考えてみたい。

4-5-1 支援対象者Bの支援の課題

3年の6月頃に中国への訪問事業の学校代表に立候補した。3年の立候補はBだけであり、熱意もあることから学年としては代表として相応しい生徒として推薦し、一旦は代表に選出された。しかし、説明会に無断で欠席したことから代表を辞退することが決定された。その際に「支援対象だから特別扱いはできない。欠席がちの生徒の登校刺激に中国への訪問事業を利用されては困る」という主旨の説明があった。Bはその決定の直後から学校に登校しなくなり、授業の欠課も激増した。

また、その対応に同情した教科担当者がBを思って色々Bに声をかけ励ましてくれた。しかし、そのことがBを一層学校から遠ざける結果になったようだ、学級担任から報告があった。よかれと思って対応しているその教科担当者に、励ましを止めて欲しいと言い出せず、欠席や欠課が増加する結果になってしまったことを悔いていたようである。

Bは自分の夢を実現させて、中国の短期留学を果たしている。一方で卒業が果たせなかったBが卒業アルバムの部活の写真の中で、卒業証書を持って写っていることが確認できた。Bはどのような気持ちで本校を退学したのだろうか。中国への訪問事業に行っていたら、本人の運命が変わっていたかもしれないことを考えると、学年で支援できたことがまだあったのではないかと複雑な気持ちになる。

4-5-2 支援対象者Fの支援の課題

この生徒は、保護者のプレッシャー（進学先や就職について）で欠席が増加したと考えていた。しかし、クラスでの人間関係の影響も少なからずあることが分かり、学校として可能な対応と支援を継続した。通常では卒業が難しいと考えられるケースであったが、成績会議の中で、Fが周囲の生徒から受けた行為によって、教室に入れないショックを受けていることを共有し、反対の声も少なくなかったが単位の修得と卒業を認定していただいた。これで、Fも保護者も次のステップに進めるのではないかと考えていた。実際、卒業後はFは予備校に通い、元気に学習を始めたように聞いていた。

しかし、予備校での人間関係に悩みを抱え、9月からは登校していないと報告を受けた。本人も母親もどうしたらよいか分からず、カウンセリングを継続しているという。

表面的な支援での問題解決ができないケースと認識している。進級や卒業だけを考えて支援をするだけでは、根本的な生徒支援にならない一例である。

4-5-3 支援対象者Gの支援の課題

この生徒は、医師の診断がある程度明確に出たので、学校が対応できる範囲が限定されるケースと考えられる。しかし、対応の初期段階で学年の対応が遅れてしまったこと、保健室でGを支援していた生徒への依存が大きくなるにつれ、大人の支援が難しくなったこと、最終的な退学の判断が本人の意向と異なり、保護者と本人と学校で確認することができなかったこと等、学校が対応すべきことが幾つかあったように考えられる。

4-6 学年で共有していた「気になる生徒」

ここまで挙げてきた支援対象生徒以外にも、学年会で話題になっていた「気になる生徒」も25名になる。1クラス平均で3名であるが、この数が多いのか少ないのかは分からない。しかし、学年の中に「支援対象予備軍」として、かなりの人数が不安や悩みを抱えていることは分かる。紙面の関係上、どのような事例であったかを簡単に列挙することに留めたい。

- ・3年次9月、11月に生徒指導（約1ヶ月の謹慎）。
- ・1年の5月から約2ヶ月欠席（クラスへの不適応と祖父母との関係）
- ・精神的に不安定。スクールカウンセラーに数回相談（クラス、部活）。スクールライフ委員会への相談。
- ・男子生徒の嫌がらせで3年11月下旬から1月末まで欠席。センター試験別室受験。
- ・学校での人間関係に悩み、出身中学の友人とつき合う。中学の下級生に襲われる。
- ・3年6月に女子生徒への嫌がらせで生徒指導。
- ・2年始めに過食→拒食。カウンセリングを数回受ける。学費の面での支援により、3年ではほぼ回復。
- ・女子生徒との交際で悩み、体重が急激に減少。
- ・腰痛で保健室によく来室。精神面も弱く、辛夷祭演劇前後は保健室に相談に来室。
- ・コミュニケーション力の不足。学習旅行不参加。お茶会で積極的な行動を見せる。
- ・姉が鬱状態で母親も疲労。それを見て本人も精神的に不安定に。
- ・男子生徒とのトラブル。交際していた生徒と別れてから、精神的に不安定になる。
- ・1年野外観察でレポートが提出できずに成績保留。以

降も学習支援が不可欠。

- ・姉が病死。保護者には笑顔を決やさず明るく振る舞うが、精神的に不安定。
- ・両親との関係が悪化し、一時期スクールカウンセラーに色々相談をしていた。
- ・父と弟のことでストレス。男子生徒とトラブルがあった。三者面談も不調。
- ・武道で全国大会出場。クラスでの人間関係に悩み、欠席をすることあり。
- ・音楽学校への入学を切望。2年後半で体重が激減、欠課が増加。
- ・学力が高いにもかかわらず、精神的に不安定になり3年時に欠席が増加。
- ・自分の力に自信が持てず精神的に不安定。メンタルクリニックに通院。スクールカウンセラーへ相談。
- ・両親の不仲、父親によるDV。一時期児童養護施設に入室。精神的に不安定。
- ・部活でのトラブル。部内で孤立。キャプテンとの対立により、精神的に不安定に。
- ・日本語でのコミュニケーション力不足。学力不振。欠席が増加。鬱傾向。
- ・家庭環境の悪化（両親の不仲）により、精神的に不安定になる。
- ・頑張りすぎるとその反動で疲れて欠席。スクールカウンセラーとの相談もあった。

4-7 「支援対象者にしない支援」について

この学年は3年間「お茶会」を継続的に実施した初の学年である。支援委員会でも「お茶会」の存在意義が問われているが、お茶会を含めて、早期対応を心掛けてきたことを以下にまとめる。

4-7-1 お茶会の意義

お茶会については、別報でその詳細を報告し、また、他の学年の実践も報告されているので、ここでは詳しく述べない。ここでは、この学年でのお茶会の意義をまとめたい。お茶会には、帰国生やタイ国留学生、下宿生への支援の側面（対象者を限定したお茶会がこれにあたる）、人間関係をうまく構築できない生徒への支援の側面（大学院生によるお茶会がこれにあたる）、勉強の仕方が分からない、受験に不安を抱える生徒の学習支援の側面（学級担任団全員で実施したお茶会がこれにあたる）があったと思われる。

それぞれの目的は異なっていたが、その根幹にある生

徒支援の精神は変わっていなかったように思われる。それは以下のようなこととまとめられる。

- ・中学校までの主従関係にある生徒と教員の関係から、人間と人間の（大人と大人の）関係に繋がる第一歩としてのお茶会の存在を認識させたかった。
- ・学級担任だけが生徒を支援するのではなく、学年の教員全員が生徒の様々なニーズに応じた支援をすることを実感させる集まりを意識させたかった。
- ・クラスや部活とは違う人間関係を作る場、家庭や学校の息苦しさから一瞬逃れて、自分の言いたいことを自由に話ができる場の提供を考えていた。

生徒支援の場として、お茶会はそれなりに生徒に認識され、活用されていたことは事実である。そして、支援対象者だけでなく、多くの生徒が「お茶会」によって救われ、励まされ、元気を貰ったからこそ、学校を無事に卒業していったのだと考えている。全員に還元できていくかどうかではなく、支援を必要とする生徒に支援の手を差し伸べる方法の一つとして、「お茶会」は有効であったと断言できる。

4-7-2 学年における早期支援

「お茶会」だけが生徒支援であった訳ではない。この学年で常に心掛けていた全体への支援対策を以下に挙げておく。

- ・欠席が3日連続した場合は家庭に必ず連絡を入れ、お見舞いをお伝えするとともに、生徒とも話をして状況の確認をすること。
- ・毎日、HR教室に足を運び、HRの生徒の様子をよく観察すること。
- ・学期に少なくとも1回は全生徒と個人面談を行い、生徒との会話を継続すること。
- ・学年に少なくとも1回は全保護者と面談を行い、保護者との会話を継続すること。
- ・成績会議で話題になった生徒については、本人を必ず呼んで（必要であれば保護者も交えて）面談を行い、今後のことについて話をする機会を持つこと。

いずれも当たり前のことのように思えて、きちんと継続することは難しいと思われる。しかし、その支援活動の成果は、ほぼ全員が卒業できた結果に表れているものと信じたい。

4-8 終わりに

生徒は卒業し新たな一歩を踏み出した。普通学校での特別支援教育は、まだ始まったばかりであり、本校の支

援教育も十分な検討がなされたとはいえない。新しい試みが全て良い試みであるとは限らないが、良かった点は次の学年に継承され、改めるべき点は学年レベルではなく支援委員会で議論して、より良い形に改めていくことを願っている。

「入学した生徒が全て卒業できる（仮に卒業できなくても次に繋がる教育支援ができる）」という仮説は、色々な課題を残しつつもおおよそ正しかったと思われる。この実践が継続的に本校で継続できるための検討をさらに続けていきたい。（文責：坂井英夫）

5 保健室から見た必要な早期支援

5-1 はじめに

保健室は、「健康診断、健康相談、保健指導、救急処置その他の保健に関する措置を行う（学校保健安全法第7条）」ため、各学校に設けられている。特に近年では、保健室にはじめ、保健室登校等心身の健康問題で悩む児童生徒に対してカウンセリングを行うための相談室としての機能が重視されるようになってきている（平成9年保健体育審議会答申）。

本校においても、身体症状で保健室に来室するが、問診をしていくと悩みを語りだす生徒、「話を聞いてほしい」と来室する生徒が少なくない。保健室において、養護教諭が生徒のサインを見逃さずに早期支援につなげていく視点は、重症化する前から対応することができるだけでなく、担任等との連携をすることによって養護教諭の抱え込みを防ぐという意味でも重要であると考え。そこで以下では、本校における保健室での相談の現状と課題について述べた上で、高等学校において必要な早期支援について、養護教諭の立場から述べていきたい。

5-2 保健室での相談の現状と課題

本校の保健室は、1日平均約20人の利用がある。内訳としては、季節や行事によって異なるが、「内科」「外科」「その他」の利用がほぼ同じ割合で見られる。「その他」には、相談目的で来室した生徒、昼休みや放課後にフラッと立ち寄った生徒などが含まれており、中には本校の「支援対象者」もしくは「配慮を要する生徒」「気になる生徒」として名前が挙がっている生徒が多くみられる。

以下では「その他」の来室者に焦点を当て、保健室での相談を＜養護教諭—生徒間の相談＞と＜生徒—生徒間の相談＞に分けて保健室での相談の現状と課題について述べる。なお、＜養護教諭—生徒間の相談＞とは養護教諭との雑談からの相談、身体症状の訴えを入り口とした

相談を指し、＜生徒—生徒間の相談＞とは保健室にいる生徒同士が自然な形で行う相談を指すこととする。

5-2-1 <養護教諭—生徒間の相談>

養護教諭の行う相談として、平成9年保健体育審議会答申では「養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし、児童生徒等の様々な訴えに対して、常に心的な要因や背景を念頭において、心身の観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携など心や体の両面への対応を行う活動」と述べられている。実際、保健室で対応する相談についても、最初は身体症状を訴えて来室するケースが多くみられる。例えば、何となく「頭が痛い」と来室するが、話を聞くと、「夜は寝られていない。受験間近でやらなければならないことが多くなっているけど、なかなか終わらない。この前の実力テストの点数も悪かった。このままだと間に合わない。」と訴えた生徒がいた。この生徒の他にも、本校では多くの課題、塾通い、遠方からの通学等でハードな生活を送っている生徒が多く、不定愁訴により来室する生徒が多い。そのため、対応においては生徒の訴えだけに焦点を当てるのではなく、身体的不調の背景にも注意して対応することで、生徒の悩みを察知できるように心がけている。

また、保健室から早期支援につなげるためには、1週間に1回以上来室する生徒（以下、頻回来室者）への対応が重要であると考えている。彼らはもともと対人関係や家庭環境等に問題を抱えている場合が多く、教室に居づらかったり、人恋しさを感じていたりしている。中には精神疾患を抱えている生徒や、過呼吸発作を起こす生徒もいる。そのため、彼らが見せる日々の小さな変化に注意して関わるようにしている。例えば、家庭に問題を抱えているものの、普段は口数の多く、明るい表情を見せていた生徒が、朝からため息をつき、落ち込んだ表情をみせるようになった。実際話をきいてみると、「やる気が出ない」「集中力が落ちている」「母親が勉強しろっということしか言わない。もういやだ」と訴えたため、相談室につないだ。

このように、＜養護教諭—生徒間の相談＞では担任に伝えることで、注意して見守ってもらったり、必要に応じてカウンセラーにつなげたりすることで、早期支援につなげている。

5-2-2 <生徒—生徒間の相談>

本校の保健室には、ほとんど毎日放課後に来室する生徒が数名いる。彼らの中には、支援委員会で名前が挙がる生徒、相談室を利用している生徒もいるが、同じよう

な悩みを抱えた者同士で教室に居づらいことや、家庭のことなどについて、「わかるー!」と共感したり、「こうじゃない?」とアドバイスをしたりしている。保健室での明るい表情を見ると、保健室が安心して息抜きできる居場所となっていることがうかがえ、保健室の利用ルール内で、必要な生徒にとっての居場所としての機能を果たせるよう配慮していきたいと考えている。

5-3 保健室から見た必要な早期支援

保健室から見た必要な早期支援として、校内に息抜きができる居場所の設定することが挙げられる。学校は教育活動を行う場であるが、生徒の居場所が教室だけということになると、息がつまる生徒がどうしても出てきてしまう。実際、「保健室なごむわー」「落ち着くー」と言う生徒がいるが、学校内にホッと息抜きができる場所を求めているからではないかと考えている。本校では、保健室が生徒にとって息抜きすることができる場所としての一端を担っているが、傷病者の休息の場としての機能が第一優先となるため、すべてを受け入れるには限界がある。そのため、生徒がなごめる談話室のような場所を設定し、さらに担任はじめ、教員も生徒の様子を見に行ったり、そこにいる生徒と関わったりすることで、早期支援につなげていくことができるのではないかと考えている。

5-4 おわりに

保健室は、学校の中でも生徒の抱える心理的問題に気づきやすい場である。今後も日々の生徒との対話を大切にすることで、生徒の出すSOSを見逃さないようにしていくとともに、保健室が学校内で息抜きできる場の一つであり続けられるよう運営していきたい。それによって、生徒にとってより良い支援につなげていきたいと考えている。
(文責：籠谷恵、五十嵐由美)

6 相談室から見た必要な早期支援

非常勤職のスクールカウンセラー（以下SC）として平成17年度の6月から本校に勤務し始め、今年度（平成23年度）で7年目を迎えた。校内に相談室を開設し、生徒・保護者の個別相談や、教員とのコンサルテーションを主に行っている。

当初週1日であった相談室開室日は3年目（平成19年度）より週2日になり、冷暖房機や相談室直通電話の設置、ソファセット等の室内備品の整備等を徐々に行い、相談者がより快適に利用できる環境が徐々に整って

来た。また、箱庭療法や描画療法を行う際に必要な用具等も徐々に揃い、カウンセリング以外の非言語的な療法を行いやすくなり、相談者のニーズに合わせた相談活動が行いやすい環境が整いつつあると言える。

相談者の来室経緯として、①担任・教科担当等からの勧め、②養護教諭からの勧め、③家族からの勧め、④本人の直接来室が主に挙げられる。生徒達と普段から関わりの深い教員からの勧めは、生徒にとって相談室の敷居を低くするきっかけとなる。相談室内での業務がメインとなるSCという職務上、相談者が来室を希望する前に、SC自らが生徒や家族に相談を勧める機会は持ちにくく、SCは相談者が来室することを待つ姿勢が基本となる。それ故、普段から「気になる生徒」について教員との情報交換・連携が必要不可欠である。

しかし、職員室という全教員と出会う機会である場がなく、相談室も予約で埋まり、空き時間がほとんどない状況では、来室している・来室を希望する生徒の担任全員にSCからこまめに連絡を取ることはなかなか現実的に難しい場合も多い。

相談室という性質上、相談者の話した内容に対する「守秘義務」は勿論重要であるが、校内で行われている相談活動という立場から、SC1人が抱え込むのではなく、その生徒と関わりの深い教員と相談内容について共有し、「集団守秘義務」をもって、より良い支援を共に考えて行くことはより重要である。

その情報共有という貴重な場として、相談室連絡会がある。この会には各学年主任、養護教諭、SCに加え、今年度から管理職も参加し、毎週1コマ（平成23年度は月曜の4限目）教員の授業の時間割に組み込む形で設定してもらっている。SC勤務初年目は月1回程度の開催であったが、相談者が増えるにつれ連絡会の内容も濃くなり、現在の定期開催の形となった。

この連絡会ではSCと養護教諭が相談室と保健室で関わっている生徒・保護者の現状について報告し、各学年主任からは「気になる生徒」について報告してもらい、お互いの情報共有と今後の支援の方向性や、今後関わる必要のある生徒に対するアプローチ等についての検討も限られた時間内ではあるが若干行っている。話し合う必要のある生徒の数が年々増え、1コマの枠の中での話し合いは年々濃くなり、時間的にも毎回足りない印象はあるものの直接話し合える機会が設定されている安心感は大きい。また各学年主任から各学年の教員に連絡会の内容を報告してもらうことで、関わっている生徒の各担任と連携が取りやすくなる利点もある。

相談室から見た早期支援を考える場合、いかにして「気になる生徒」の情報を収集し、その生徒や家族が相談室に来室相談・または電話相談をしやすくなるか、ということが鍵となる。また、週2日という限られた相談活動であるが故、直接関わる生徒には限度があり、担任・教員から「気になる生徒」についての相談を受け、共にその支援について考える間接的な関わりも必要になってくる。

それらのことから、相談室連絡会を軸として、普段から教員との情報共有・連携を心がけ、困っている生徒達と、多忙な中その生徒や家族を支えようと奮闘されている教員の間に「黒子」のように存在し続けることがSCとしての自分の役割だと思って日々微力ながらもできる限りのサポートをさせていただいたら、と思っている。(文責：喜納祐子)

7 中学から高校への必要な早期支援

7-1 中学生の特徴

6年間慣れ親しんだ学級担任制の小学校から教科担任制の中学校へ進学することは、それだけでも大きな変化である。制服を着るようになり、学ぶ教科が増え、学期ごとに定期考査があり、部活動が始まる。通学時間が長くなる生徒もいる。間近で見ていると、よくこの変化に適応できるものだと思うほど、小学校から中学校への環境変化は大きい。「中一ギャップ」という言葉に表されるように、これらの変化に馴染めず、学校生活が難しくなる生徒も全国的に存在する。

このような外的な変化に加えて、内的(身体的)な成長も著しい。男子では中学校の3年間で平均して10cm以上身長が伸びる。見える景色が変わるほどの変化である。彼ら自身にとって、言葉通り、今日の自分と明日の自分はあきらかに違う。こうした心身の未確定さを支えるのは、成長することをポジティブにとらえる意識、これからの自分に期待する気持ちであり、それは言い換えればまだ自分がどういう人間なのか意識していない幼さということでもある。「毎日いらいらするけど、何にいらいらしているかわからなくて余計いらいらする」という生徒の言葉は、端的に彼らの成長段階を示している。「不安」「緊張」「嫌悪」などに分類されない漠然とした苛立ちは、環境変化や体内のホルモンバランスの変化など様々な要因で起こり、それを言語化して他者に伝えることは難しい。

7-2 自我と個性の獲得

発達障害、中でも学習障害に関しては、教科別の学習が主となる中学校でその存在が顕著になる例も少なくない。誰しもが持つ得手不得手とは異なり、特定の概念の習得や抽象化の困難さは、一見外からは量りがたい。それが「成績が悪い」という形であらわれた時、その原因としてなるべく多くの可能性を考えることが教員には必要となる。そして困難の克服にむけて方策を練る時も、「聴覚情報と視覚情報など取り入れやすい方法を探す」「パターンを蓄積する」「できない部分を他の部分で補う」など様々な方法を用意し、それが有効だった時に生徒本人が「自分はこの方法が向いている」という自己理解を目指して指導することが求められる。

コミュニケーション上で困難がある場合も同様である。中学生が高校生と大きく違うのは、自我がまだ未発達であるという点であろう。「あなたはどう思うの?」という問いは、問われるべき自我が明確でないためあまり意味がない。問われてはじめてそこに自我があることを意識するのである。これまで無条件に受け入れていた保護者や教員の価値観が、自分のものではないかもしれない、ということに気づきはじめる。

集団生活の中では、人と自分が違う(かもしれない)ことを意識しはじめたばかりである。「人と自分は違うの?」「どういう風に違うの?」「どのくらい違うの?」「違っていてもいいの?」「違っていても仲良くできるの?」「違っていても仲良くするにはどうしたらいいの?」「違っていたとき仲良くする必要はあるの?」これまで「ぼくたち・わたしたち」としてまとめて認識していた級友が「ぼく・わたし」の複数からなるという客観を得てから、その中での自分の意味や価値を見いだすまでにたどる道のりは、中学校時代だけでは終わらない。まして、コミュニケーション上に困難がある場合、その「違い」を意識するのは対人関係でつまずいた時である。つまずきがあって初めて本人も周囲もそこに困難があると気づくことができる。気づいて、それを克服する(またはやり過ごす)方法を本人が獲得できれば、つまずきは必要な経験である。誰しもが成長課題として同様のつまずきを経験しやすい中学校時代にそれを経験することで、その後の困難への立ち向かい方が変わってくる。自我の未発達さ(幼さ)故につまずかずに中学校生活を終えたとしても、高校に進学してからそれが起こる可能性は充分にあるということである。

7-3 進学先としての高等学校

多くの生徒は自分に向けた高校を選び、受験をして進学する。中学校時代に困難があきらかになっていれば、その困難に対応できる支援を実施している高校を選ぶことになる。疾患の治癒が必ずしも右肩上がりではないように、成長も予測は難しい。義務教育でなくなる以上、生徒の持つ困難が、学校の求める力量に至らない原因になれば、卒業資格は得られない。中学校でのつまずきや困難が、高校で再びあられもないよう、また、高校での経験や学習、成長を通して、生徒がより良い人生を選んで行けるよう、高校進学は成績だけではなく多くの要素を含んで検討される。

7-4 情報交換と連携

高校では、入学してきた生徒のこれまでの情報を欲しいと思う場面も多い。困難や疾患があきらかな場合は、保護者や出身中学校からあらかじめ書面などで伝えられることがある。しかしその様式などは決まっておらず、誰から誰への情報提供なのか、どういった支援が必要なのかなど、ケースバイケースで行われることがしばしばあり、システム化されていないため、双方向の情報交換には至りにくいのが現状である。高校で困難があきらかになってはじめて、問い合わせをすることも少なくない。実際に学校現場では、高校に入学した生徒の元学級担任は、年度が変われば既に次の新しい学級の担任であり、年度当初の職務に謀殺されている。生徒の進学先の学校の学級担任の名前を知らされることもまずない。異動があれば、新年度になってからの情報提供はもっと難しいものとなる。生徒の進学が決まってから年度内に情報提供をするためには、中学校でも高校でも共通の情報提供用フォーマットがあることが望ましい。また、支援の継続を求める際、窓口が明示されていて欲しい。高等学校での特別支援委員会の設置率が上がってきてはいるものの、学校によってその名称が違ったり、機能が違ったりする現状では、個別のケースについて相談したり情報提供したりするまでに為すべき手順が少なくない。困難や疾患があきらかな場合でさえこうした課題がある。まして、少し気になる、もしかしてと思う、といった段階の生徒について情報を交換できる機会と方法はほぼないといっていいただろう。

今後、こうした課題に対して模索的にでも附属学校同士で何らかの伝達様式や連絡ルートの試作をすることが望まれる。
(文責：塚越 潤)

8 学校運営と必要な早期支援

8-1 支援の方向性と高等学校の目的

文科省は、「特別支援教育」を、「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの」と定義している¹。一方、本校では、平成19年度より「発達障害に限定せず、目の前にいる困難を抱えたすべての生徒に対応できる支援」という方向性で支援体制を築いてきた²。一般論として、この方向性はひとつの理想を表現したものといえるが、学校運営の視点からは、2つの問題を抱えているように思われる。第1の問題点は、支援対象を発達障害に限定しないため、生徒の抱える「困難」の範囲があいまいになってしまったことである。第2の問題点は、学校という教育システムとの不整合性である。学校を、数十名の生徒を一つの教室に集め、同一のカリキュラムに基づいた同一の授業で学ばせる量産型の教育システムとしてとらえるならば、それは様々な困難を抱えた「すべての生徒」に対応する構造になっていないからである。

第1の問題点に関しては、「困難を抱えた生徒」の意味が、困難の内容によらず不登校あるいは不登校気味になった生徒を実質的に指している現状では、その是非はともかく、困難の範囲のあいまいさは深刻な問題になっていないといえる。そこで、ここでは第2の問題点に絞って論じることとする。

学校教育法によると、高等学校は、「中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施す」ことを目的としている(第6章第50条)。ここで支援との関わりから重要となるのは、「心身の発達に応じて」という語句の解釈である。もちろん、この語句を、高校生としての心身の発達といった大雑把な意味にとることも可能である。しかし、支援の観点からは、意味を掘り下げて考えるべき語句に思われる。ここでは、次の2通りに解釈してみる。

まず、「心身の発達に応じて」は、心身の発達段階にある程度の均質性を要求するという意味に解釈することに着目する。この解釈は、先に述べた教育システムとして学校をとらえた場合に深い意味を持つてくる。量産

¹ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main.htm

² 平成19年度・20年度文部科学省「高等学校における発達障害支援モデル事業」最終報告書(東京学芸大学附属高等学校)

型の教育システムがスムーズに機能するためには、学力を含めた意味での心身の発達段階の均質性と授業への出席が、集団としての生徒に要求されるからである。この場合、学校が要求する均質性から大きく外れた生徒は、学校の教育システムに適合しないものとして考えざるを得ないだろう。これが、上で指摘した不整合性の意味である。

一方、「心身の発達に応じて」を、「個々の子どもに合わせて」という意味に解釈することも可能である。この場合、上で論じたことは一転し、通常の学校で行われている多人数を対象とした教育システムの方が、高等学校の目的を果たすには不合理なものに見えてくる。この考えは、現在のほとんどの普通高校の運営を否定しかねない。

上の2通りの解釈は、困難を抱えた生徒か学校かのどちらかを否定するものとなっている。この逼塞状態は、学校を、「数十名の生徒を一つの教室に集め、同一のカリキュラムに基づいた同一の授業で学ばせる教育システム」としてとらえたことが招いたものである。しかし、果たして高等学校は、教育課程で定められた教科を教授し単位を修得させる教育システムに過ぎないのであろうか。もちろん、そのような見方は、学校教育法の定めからも正しくない。実際、同法第5章第51条には、「豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと」「社会において果たさなければならない使命の自覚」「個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」等と記されている。これらの規定は、単純化して述べれば立派な社会人となるように生徒を育てなさい、ということになるだろう。要するに、高等学校は、社会人となる準備をする場なのである³。このように高等学校をとらえると、上記の教育システムとしての学校のとらえ方からは見えてこなかった支援の在り方が浮かび上がってくる。それは、「社会人となる準備の場としての高等学校へ、その生徒なりに参加できるようにする」という支援である。次節では、この考え方を、レイヴ (Lave) とウェンガー (Wenger) による「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation, LPP)」⁴ の概念から展開してみたい。

³ 単なる大学進学準備のための場でないことは言うまでもない。

⁴ ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳「状況に埋め込まれた学習 ―正統的周辺参加―」(産業図書、1993)

8-2 実践共同体としての学校と参加への支援

レイヴとウェンガーは、新参者 (novice) がどのようにして熟練者 (expert) になっていくのかを、徒弟制を典型例とする実践共同体において、「ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務を遂行する技能を獲得していく」参加の過程を学習過程としてとらえることにより説明した。この過程を「正統的周辺参加」という。すし職人を例にとるならば、飯炊き3年から始めて1人前のすしを握れるすし職人になるまでが周縁的参加から十全的参加へのプロセスであり、徒弟制としてのすし屋が実践共同体ということになるだろう。

徒弟制のような、ある社会实践における技能の習得に着目した場合、社会は、様々な実践共同体の集合として、縦に分割される構造を持つものと言える。しかし、社会そのものを広い意味での実践共同体としてとらえ、社会人の形成過程を正統的周辺参加としてとらえることも可能であろう。これは社会を横に分割する考え方で、一人前の社会人を、社会という実践共同体の十全的参加者として位置付けるものである。この視点に基づくと、高等学校は、社会に参加するための準備教育を全人格的に行う場、すなわち正統的周辺参加としての学習を提供する実践共同体として位置付けられることになる。正統的周辺参加の概念により、学校教育法第51条に直接結びつく形で高等学校を位置づけることができるのである。

レイヴとウェンガーは「学習を内化として見るのとは対照的に、学習を実践共同体への参加の度合いの増加とみることは、世界に働きかけている全人格 (whole person) を問題にすることである」と述べている。この視点から社会との接点を持つ学校行事や生徒会活動を見直してみると、社会という実践共同体に十全的に参加できるようにするための、文字通りの正統的周辺参加の学習過程として、重要な意義を持ち始める。本校のモットーである「本物志向の教育」は、正統的周辺参加の概念を最大限に高等学校での教育に取り入れようとする伝統的な理念として再解釈することができる⁵。

正統的周辺参加の場としての学校においては、さまざまな悩みを抱える生徒を受け入れることは、他の支援を必要としない生徒にとっても大切なことである。なぜなら、現代社会には様々な悩みを抱える多くの構成員が存在し、したがって現代社会への十全的参加はそれら悩み

⁵ 一般に学校の伝統と呼ばれるものは、実践共同体としての構造化の一種と解釈できるかもしれない。

を抱える同胞の理解と受容が大前提となるからである。

また、不登校になっている生徒を何らかの形で学校に復帰させることは、社会への「正統的周辺参加」の場⁶に復帰させるという意味を持つことになる。悩みを抱えたままでよいから、社会人になるための準備の場としての学校に、再び参加させることには大きな意義があるといえる。この場合、本来は社会という実践共同体の一部である高等学校を、改めて十全的参加（普通の学校生活を送れる生徒）を仮定した実践共同体とみなし、その十全的参加を目指した正統的周辺の参加という、いわば入れ子構造の参加として、上で述べた復帰をとらえることができるだろう。具体的な参加のスタイルは生徒ごとに異なってもよい。つまり、生徒にあった形の正統的周辺参加という考え方があってもよい。ただし、不登校の期間が長くなると、生徒の持つ学校への「参加」意識が薄れてしまう恐れがある。そうなると、「参加」させるための支援も困難になる。早期支援は、そのような状況を防ぐために欠かせないものといえる。

以上、実践共同体としての学校という概念を導入し、学校への正統的周辺参加の道をつけるための支援という考え方を示した。学校運営の立場からも、「学校への参加を促す支援」という考え方は、登校そのものの位置づけを明確にするものとして受け入れやすいのではないだろうか。高等学校は、教科教育の場だけではなく、参加する場でもあるのである。（文責：新田 英雄）

9 必要な早期支援を総合的に評価する

9-1 早期支援をめぐる最近の動向

平成23年8月5日に障害者基本法の一部を改正する法律が公布され、一部を除き同日に施行された。今回の改正は、かなり大規模なものと言っていいだろう。例えば、以下のような改正が含まれている。

定義（法第2条関係）

- (1)障害者の定義を身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）その他の心身機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものとしたこと。
- (2)社会的障壁の定義を、障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のものとしたこと。

⁶ ただし、高等学校は社会への正統的周辺参加への唯一の場ではない。

差別の禁止（法第4条関係）

- (1)何人も、障害者に対して、障害を理由として、差別することその他の権利利益を侵害する行為をしてはならないこととしたこと。
- (2)社会的障壁の除去は、それを必要としている障害者が現に存在し、かつ、その実施に伴う負担が過重でないときは、それを怠ることによって(1)の規定に違反することにならないよう、その実施について必要かつ合理的な配慮がされなければならないこととしたこと。

改正のポイントとしては、発達障害が障害としてきちんと位置づけられたこと、社会的障壁という考え方が加わったこと、社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮がされなければならないと明言したことなどが挙げられる。

メンタルヘルス上の問題についても、国レベルで活発な動きがある。平成23年7月に厚生労働省は、都道府県が作成する地域保健医療計画で、「4大疾病」とされてきたがん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病に、精神疾患を追加して「5大疾患」とする方針を示した。また、平成23年10月に厚生労働省は、職場のメンタルヘルス対策を義務化する方針を打ち出した。具体的には、事業者に対し医師などによる従業員のメンタルヘルス（心の健康）チェックを義務付ける労働安全衛生法の改正案要綱を労働政策審議会に諮問した。メンタルヘルス上の問題は、多くの人に影響を与え、当人や周囲の人の生活や人生に大きな困難をもたらす問題として、その重大性がようやく認識され、本格的な対策が動き出そうとしている。その中でも、特に早期発見と早期対応が求められている。

高等学校においても、発達障害とメンタルヘルス上の問題は、重大な問題として認識されつつある。文部科学省は、平成19年度より「高等学校における発達障害支援モデル事業」を実施し、高等学校における発達障害のある生徒の理解や支援に関して、どのような課題があり、どのような支援方法が有効についての研究が行われた。多くの都道府県では、発達障害のある生徒への高等学校における支援に関するパンフレットやハンドブックを作成し、学校教職員への啓発を行うようになってきた。

しかし、現時点では高等学校における発達障害のある生徒の支援は、まだ発展途上である。自我が芽生え、行動範囲が広がり、交友関係も複雑化してくる高校時代には、著しい成長が見られる場合もある一方で、不登校、精神的不調、非行や暴力行為などの二次的問題を併発してしまう生徒も少なくない。

高等学校におけるメンタルヘルス上の問題についても、大変心配な状況である。気分障害（うつなど）、不安障害（パニック障害、強迫性障害、社会不安障害など）、摂食障害、統合失調症など、なんらかのメンタルヘルス上の問題で苦しんでいる生徒は、ほとんど全ての学校にいてと言っても過言ではないだろう。メンタルヘルス上の問題を抱えている生徒は、登校することが困難になったり、教室で授業を受けることが困難になったりする場合も少なくない。

企業の世界では、メンタルヘルス上の問題で仕事を続けることが困難になった場合、休職してから、時間をかけて職場復帰支援プログラムを受け、リハビリ出勤を経てから復職を目指すという考え方も広がりつつある。高等学校の場合は、小中学校よりも進級や卒業の認定がより厳格になり、長期にわたり学校を欠席したり、授業に出られなかったりする日が続くと、進級や卒業ができなくなる。同年齢の仲間と共に進級し、共に卒業する場合が大多数の日本の高等学校においては、進級や卒業が遅れてしまうプレッシャーは、生徒や保護者にとって非常に大きなものである。休息を取り、治療を優先させるよりも、進級や卒業のために無理に出席を続け、結果として状態が悪化するケースもある。

9-2 早期支援の重要性と本校の取り組み

発達障害やメンタルヘルス上の問題に限らず、生徒は様々な問題により躓き、悩み、苦しむ可能性がある。そのような生徒の支援について、どのような視点を持てばよいのだろうか。重要となるのは、早期支援の視点である。問題が深刻になり、長期化すると、改善や回復には多大の時間と労力が必要になり、生徒が大変苦しむことになる。問題の発生、重度化、長期化を未然に防ぐことが出来れば、いちばん良いことである。ここでは、予防科学の視点から、本校（東京学芸大学附属高等学校）の試みについて、概観していきたい。

①一次予防：予防教育

一次予防は、全ての生徒を対象にして、問題の発生自体の予防を試みる取り組みである。代表的には、各種の予防教育が含まれる。生徒自身が、様々な問題の特徴や関係する危険因子と保護因子、予防法や対処法についての知識を得ることが、予防教育の内容となる。このような内容は、保健体育を初めとして、各教科等の中でも行われている。

本校においては、これらに加えて生徒向けの講演会を行っていることも特徴としてあげられる。講演会で、発達障害等の問題について触れることは、自らの特性を振り返ったり、仲間や家族についての理解を促したりする意味があり、多様な人々と今後出会ってゆく生徒にとって、大変重要な機会となっている。

また、宮城政昭教諭による総合的な学習の時間における授業「自己理解と他者理解」も予防教育的な内容を含んだ意義深い取り組みである（平成23年度公開教育研究大会でも実施）。青年期にある高校生にとって、アイデンティティ、劣等感、自己嫌悪などの自己に関する問題、友人、恋愛対象、親などの他者に関する問題は、悩み事やストレスの中心を占めると言えよう。グループセラピーの要素を取り入れつつ、クリッカーにより生徒が主体的に授業に参加しながら仲間の回答傾向を知ったり、ペアワークなどで体験的に学んでいったりする授業は、大変画期的であると思われる。

②二次予防：早期発見・早期対応

二次予防は、深刻な問題に発展する危険性の高い生徒を早期に把握し、早期に対応していくことである。本校の取り組みとしては、欠席調査が二次予防として挙げられるであろう。欠席が多い生徒は、心身の不調や生活上、進路上、人間関係等の困難を抱えている危険性が高いと考えられる。このような危険性の高い生徒を早期に把握する方法として、欠席調査は有効であると思われる。

また、まだ深刻な状態ではないが、心身の不調や悩み、困難を抱えている生徒が気楽に立ち寄れる居場所を意図的に作っていくことも、学校における二次予防としては重要になってくる。生徒指導的観点とバランスや整合性を取りながらも、保健室や相談室に、問題が深刻化する前に立ち寄れる雰囲気やシステムを作っていくことが求められ、本校でも様々な工夫が行われていると評価できる。

本校の特徴的な二次予防の取り組みとしては、お茶会、下宿生の会など、生徒と教職員やボランティア学生が、気軽に談笑できる会を意図的に開催していることが挙げられる。お茶会は、誰でも立ち寄れることから一次予防の要素も含んでいるが、他の場所にはなじみず、教職員やボランティア学生などとの接触を臨む生徒にとっては、二次予防としても重要な空間と時間を提供する機会になっていると評価できる。何かと苦勞することも多い下宿生と教員とがリラックスして関われる下宿生の会を

設けることは、二次予防としても重要である。

本校が実施している二次予防に関連する組織的な取り組みとして、支援委員会と相談室連絡会が挙げられる。これは、次に述べる三次予防の要素も強いが、早期発見・早期対応についても検討するという点で、二次予防にも含まれる。深刻な問題にはなっていないが、気になる生徒、心配な生徒について、スクールカウンセラーを含む教職員が情報交換をし、情報を共有することは、生徒の早期支援のためには欠かせない取り組みである。

難しいのは、高等学校ほどの学校規模になると、二次予防の対象となる生徒の数が、非常に多くなることである。学校規模、入学してくる生徒の特性、学校の置かれている状況などによって変わってくるが、高等学校の場合、二次予防の対象が数十人から百人を超えることも想定される。これだけ多くの数の生徒の情報について、どのように収集し、どのように共有し、意見交換を行うか、どの学校にとっても課題と言えるだろう。

③三次予防：再発予防・悪化予防

三次予防は、既に問題や困難を抱えてしまった生徒に対して、再発や悪化を予防する働きかけをすることである。通常は、治療や専門的支援、指導などと並行して行われる。必要に応じて支援委員会や相談室連絡会などでも話し合いを行い、保護者や本人からも話しを聞きつつ、丁寧に対応している状況である。欠席や欠課数が増えていくと、進級や卒業にも影響が出てくる。スクールカウンセラーを含め、学内での連携が不可欠であり、場合によっては外部機関との連携も必要となる。既に述べたように、企業の方では職場復帰支援プログラム、リハビリ勤務などの考え方が徐々に広がりつつある。学校教育におけるこのような考え方の可能性を探ることも、これからの課題であるかもしれない。

9-3 まとめ

本校における特徴的な取り組みとして、この他にも特別支援教育に関する保護者向けの講演会の実施、教職員向けの研修の実施を続けていることが挙げられる。生徒を見守り、支える立場である教職員や保護者の知識や技能を高めることは、早期支援において欠かせない取り組みである。

振り返ってみると平成19年度・平成20年度の文部科学省の「高等学校における発達障害支援モデル事業」の指定をきっかけに進められてきた本校の取り組みは、その

出発当初から発達障害のある生徒だけではなく、全ての生徒のための支援体制をどう構築していくのか、早期支援をどのように展開していくのかを意識していたことが改めて分かる。これまでの取り組みを一層ブラッシュアップしつつ、高校生という発達段階、高等学校という組織の独自性、学校規模に合った支援についての研究と実践を積み上げていくことが期待される。

(文責：松尾直博)

10 おわりに

今年度も、支援の記録を残そうと考えた背景には、次のような事情がある。①支援が必要な生徒や保護者が増える傾向にある。②対応が難しい事例や、長期の休養が必要な事例には、ある程度の指針が必要である。③担任や教科担任だけでは変化が見つかりにくいことがある。④自己理解や受容が必要なことが多い。⑤学校という社会の中では、依然として画一的な評価が優先されている。

ちょうど2年前に私がフィンランドに研修に行ったとき、高校生が心理学の授業を受けているのを見学した。本来、子どもから大人へと変容する高校生にとって、心理学は必要なことではないかとそのとき思った。答えが見つからないテーマにじっくり時間をかけ取り組み、それぞれのペースで学ぶということは、日本の高校では大変難しい。今の高校生は、答えのある問題に取り組み、早く答えを出すことには長けているが、日常生活のなかで、答えのない問題に取り組み体験が少なく、答えのないことに対する忍耐力が乏しいようである。あるいはそういったことを考えることにふたをしまっていることさえある。「わからないことがあって当然であること」と認識し、「答えが見つからないから楽しいのであること」を体験できるような早期支援ができないかと考えている。

モデル事業からの「発達障害に限定せず、目の前の困難を抱えた生徒に対応できる支援」という方向性や、個別の支援の実践、教職員、保護者および生徒への啓発活動（5年間で15回を越える教員研修会と10回を越える生徒や保護者対象の講演会）を行った効果は顕著で、当初の「発達障害の理解」から「具体的な対応」へとその目的が変化している。また、保健室、相談室と学年や担任の連携体制も充実してきており、「個」への取り組みが厚くなってきたと感じる。さらに、「お茶会」や「進路相談会」、「学習相談会」などの一次支援の試みが随所で始まっている。生徒への対応という部分でも、具体的な実践例や高等学校で必要な早期支援についての情報の

蓄積と共有をし、どのようなアセスメントを行い、どのような支援体制を構築し、どのように教員の意識を高めて行くかを考えて行きたい。また、生徒把握のための定点観測に必要な質問用紙の作成、自己理解のためのパンフレットの作成なども検討して行きたい。

今回、自主的に報告書をまとめるという企画に対して、多くの先生方から協賛いただいた。そして、校内だけでなく、東京学芸大学や附属竹早中学の先生方からも寄稿いただいた。大変ありがたく感謝に堪えない。今年は委員長の方針から、委員会としての研究体制を維持することができなかったことは残念なことであるが、新しい視点で課題が見つかったことはうれしい誤算である。また、講演会や研修会などの講師の先生方からはたくさんのご助言をいただくとともに、本校の取り組みをあと押し頂く言葉をいただいた。教員向けのパンフレットだけでなく、生徒に向けたリーフレット作成の企画などが具体化したのもそのお陰である。また、可能な限りの早期支援のアプローチを検討するためには、保護者との協力関係は不可欠である。保護者向けのリーフレットの作成、共同の勉強会の開催、さらには専門的な知見を有する方の協力依頼など可能性は広がって行く。

最後に、この報告書の作成にあたりご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げ結びとする。

(文責：宮城政昭)